

目 次

21世紀年頭にビデオ「二神島」を見て	会 長	二神浩三・・・	2
副会長をお承けして	副会長	二神俊一・・・	4
シリーズ			
二神氏ゆかりの地を訪ねて 二神島	常任理事	豊田 渉・・・	16
系譜・家紋紹介 愛媛県中島町吉木	常任理事	二神重則・・・	20
二神氏苗字の歴史	事務局長	二神英臣・・・	24
二神古文書の解説(新)	事務局長	二神英臣・・・	28
会員さんからの便り			
	岡山市	黒瀬一朗・・・	30
	札幌市	二神種臣・・・	31
二神氏関連サイトの紹介			
	常任理事	二神重則・・・	32
二神修理進について			
	理 事	二神信也・・・	38
双水流創始者 二神半之助正聴のこと			
		白木良彦氏・佐々木麻雄氏・・・	42
文禄の役			
	常任理事	二神重則・・・	48
役員のつぶやき			
先祖の島を訪ねる旅	理 事	二神成幸・・・	50
ふるさと河の内	理 事	二神昌生・・・	52
知られていない高知県(小才角)	二神		
	理 事	二神栄三・・・	54
思いを繋ごう	常任理事	豊田 渉・・・	56
城辺町学習交流会記念講演 1999年9月12日			
「南宇和の歴史と御荘二神氏」			
	南宇和民俗歴史文庫	藤田儲三氏・・・	72
二神系譜研究会会則	・・・・・・		74
二神系譜研究会役員名簿	・・・・・・		76
二神系譜研究会入会申込書	・・・・・・		77
編集後記	・・・・・・		79

巻頭語

21世紀年頭にビデオ「二神島」を見て

会長 二神 浩三



激動の20世紀が終わり、輝かしい平和な世紀が期待される中に21世紀を迎えた。何かが新しくなることを願っていただいたが、暦を捲るように簡単に世界情勢が変わる筈もなく、閉塞状態の世情がそのまま引き継がれている。

将来の社会への期待感の無さとは裏腹に、二神系譜研究会では将来に向けての進展がますます広がりつつあり、各方面からの研究成果に対する期待が寄せられていることは、真にご同慶の至りです。

網野善彦先生の著書「日本列島に生きた人たち 6 伝承と文学 上」岩波書店 2000年、10月、184頁で二神系譜研究会についてご紹介を頂きました。また、「日本」とは何か」講談社 2000年、12月、243頁では二神島の歴史について紹介して頂いています。

更に、昨年10月には、紀伊国屋書店映像情報部企画、撮影ポルケによるビデオ「二神島」全三巻が全国の書店で発売されたことは既にご承知の通りです。当会の会員で全三巻を購入された方は現在のところ十数名に上っています。

第一巻では、二神島の全景が飛行機からの映像で映し出され、島の人達にとっても楽しめるものとなっています。中世の頃の島の様子を想像しながらの網野先生の史実に基づく詳しい説明、集落の建物などについては神奈川大学工学部建築学の西先生による解説、島の人々の生活を映し出しながら展開されていき、終わりの方では二神系譜研究会の北条市での総会の様子や豊田町における「豊田種長追善供養祭」の模様などが美しい映像で紹介されています。

恐らく、これまでに二神島を訪問された方は、実感を伴って新たな感動を覚えるでしょうし、行ってみたいと思いつつも行けないでいた方は二神島の現状とそこに生きた二神氏のご先祖の歴史を感じ取られるものと思います。しかし飽くまでも歴史のビデオですから、歴史的な興味をそそる映像です。多分、全国の歴史家等にとっても貴重な資料となるものではないでしょうか。二神氏にとっては後世まで残して置きたい一

巻と思います。是非、お手元に置かれることをお奨めします。

第二巻では、二神家の墓地とその発掘調査の現場を神奈川大学日本常民文化研究所橘川所長、東国歴史考古学研究所田代所長ならびに鶴見大学大三輪先生等の説明を交えて、克明に描き出していて、特に、一の段にある家形の墓の故人の名前が特定されていく過程には、流石にプロと感動します。また、発掘調査というものが如何に大変な作業であるかが、理解されます。その中でも、若い女性の人骨の発掘には思わず手を合わせたいような衝動にかられました。

第三巻では、埋没した史跡の発掘方法、また、その復元方法と、それらのために使用する計測器具等の説明があり、こうした作業に従事する方々にとっては生きた教材を提供しています。

長期にわたっての取材であり、膨大な量のビデオテープをこれだけの巻にまとめ上げ、編集するのは大変なことだっただろうと思いながら、二神氏にとって貴重な資料を作って頂いた紀伊国屋書店さんを始め、関係された方々に厚く御礼申し上げる次第です。

このように献身的なご支援を頂いている二神系譜研究会です。これからも精力的に調査研究を進め、単に二神氏のみならず、関係する他の氏族との歴史的つながりにも目を向けながら、中世以降の伊予の歴史に二神氏の歴史を定着させたいものと、21世紀の年頭に夢を膨らませています。今後とも一層のご支援ご協力をお願い致します。



副会長をお承けして

副会長 二神俊一



このたび二神浩三会長からご指名を受け、大変僣越で恐縮ですが、副会長をお引き受けいたしました。まだ現役の身にて多忙ではありますが、微力ながら諸活動に参画させていただきます。

さて、「二神系譜研究会」の発足の経緯や、本冊子「海の民ふたがみ」の発刊経緯等につきましては、創刊号の二神浩三会長のご挨拶に詳しく述べられて

いますので、ここでは、私が感じたことなどを触れてみたいと思います。

今、21世紀を迎えた今日、私たちの当研究会の活動は、正に後世に贈れる、価値ある、貴重なプレゼントだとおもいます。

今、この活動の輪を広げ、更に掘り下げた調査活動を進めていくには今しかないような気がしています。

幸いにも、会長をはじめ、事務局長、常任理事の方々は、大変、熱心で、又、史実に詳しく、本当に強力なメンバーの集まりだなー、とつくづく感じ入っております。

さて、二神島に関して、思い出があります。

私は、二神島の存在を知ったのは、6－7歳の頃であったでしょうか。父親（故萬次郎）が津和地小・中学校の校長（昭和26年4月から3年間）として津和地へ単身赴任していた頃で、母（千代子）に連れられて行った時の記憶が初めてです。

温泉郡小野村（現在は松山市ですが）で生まれた私は、当時、海といったら梅津寺の海水浴場くらいしか知らなかったと思いますが、高浜から小さな船に乗って、随分長い時間掛かったように思いますが、（途中で船酔いをして苦しかったのを覚えています）やっと津和地へ着いて、小さな栈橋に父親の姿を見つけてほっとしました。

確か、父親は、若島さんという方のお家に下宿していたのか、定かではありませんが、とにかく畳にころがっていると、船酔いもおさまり元気になり、周囲をみると、小さなランプがあり、こんなランプを使っているのかなー、と子供心に島の暮らしを想像しました。

栈橋の近くでは、たくさんの小魚が泳いでおり、磯の香りがとても心地良く、とても新鮮な感じを持ったのをついこの間のように思い出されます。

津和地から怒和島や二神島が良く見え、父親から、二神島を指差して教えてもらったのが初めてです。

その後、学生時代に二神島へ初めて行ったことや、その後、銀行員となって子供たちを連れて津和地へ行き、小林貞治氏（故萬次郎が、大変お世話になった当時の郵便局長）宅にて新鮮な刺し身をご馳走になり、子供たちが（余りのおいしさに）目をまるくしたことなく、「島」の様子が走馬灯のように蘇ってきます。

近年、二神島へ行く機会が増えていますが、この島へ行くと妙に気が休まるのは、私達のDNAが670年前から今日までこの島で生きてきたからでしょうか？

これからも関係者のご協力、ご支援を得ながら、「二神氏のルーツ探し」のロマンの旅をご一緒しましょう。

二神氏ゆかりの地を訪ねて

No. 2 二神島

常任理事 豊田 渉

ハアー 島はよいとこエー二神島よ（ソレー）
浮いて沈んでカモメの波に
沖は千石大船小船
国の宝を積んでゆく 積んでゆく

ハアー 波路はるかなエー大由利小由利（ソレー）
積んで積まれてまんまる石の
沖は千両由緒の島よ
長者屋敷や寺の跡 寺の跡

〈「二神音頭」より〉



上空から見た二神島全景

●世界にその名を知られた二神島

昭和46年の春、アメリカ合衆国にあるナショナル・ジオグラフィックマガジン社の記者とカメラマンが二神島を取材しました。翌年、「ナショナル・ジオグラフィック5月号(VOL. 141)」に、『日本のある村での生活』というタイトルで、26ページにわたって紹介されました。日本全国を見て回った結果、「日本古来の姿を多く残している」ということで紹介されたのですが、日本中にはたくさんの町や村があるのに、なぜ二神島が？と、不思議に思うと共に、嬉しくもありました。160ページほどもある、その5月号には、『二神島』の3文字だけが漢字で掲載されていました。それは二神司朗氏の筆によるものでした。ちなみに、前述の雑誌で二神島は「双子の神の島」と英訳されていました。

●種家が二神島に来たのは、いつ？

豊田(二神)種家が山口県豊田郷から二神島に本拠を移した時期については明らかではありません。これに関しては、鎌倉時代末説(菅菊太郎氏)、室町時代初期説(景浦勉氏)、具体的に長禄3年(1459)室町時代中期説(宮本常一氏)、南北朝末期説(愛媛県史、二神氏を名乗ったのは家経とするもの)とするなど諸説があるところです。二神系譜研究会としては、二神島の安養寺に現存する「大般若経」の奥書に沙弥法善(二神吉種)のある元徳二年(1330)頃の鎌倉時代末説ととらえています。

安永十年(1781)に二神種章が記した「二神氏末家之次第」の一番最初の「勘右衛門家」には、次のようにあります。

勘右衛門家

元祖 某 此家時代至テ古先祖筋目ノホド不知古記等在
之ト イヘドモ焼失ス (この間略) 口伝ニ曰ク往古此家
二神嶋ニ 古ク住居スル処ニ神藤十郎種家予州ニワタリ河野
家ニ属シテ知 行スル中ニモ二神嶋ヲ住所トスル故種家ニ随
テ後追ニ一家ト成 テ供ニ二神ヲ名ノルカ・・

これから推測すると、種家が二神島に来た時、「勘右衛門」という家がすでにあったことになります。

それから数百年が経過した今、連綿と受け継いできた歴史の中で二神島の人たちは生きています。時の流れとともに往時の面影は薄れたという感は否めませんが、現在も一部残っている屋敷や墓地に佇んだとき、二神氏の姿が見えてくるようです。

さて、前置きはこれくらいで、「海の民ふたがみ創刊号」では『北条市』を紹介しましたが、今回は「二神島」を紹介します。

【二神島とは】

二神島という名称は、どういうところからつけられたのでしょうか。説はいろいろあるようですが、昭和7年12月25日発行の『伊予史談』で菅菊太郎氏は、「この島に古来より二鎮座神があったゆえに名付けられたとあるのが、極めて妥当なものである。その二つの神とは、八幡社（妙見社）と巖島神と考えられる。」と述べています。現在の二神島においても、「神様が2ヶ所あるので“二神”というんです」と言うのが一般的となっているようです。

二神島は愛媛県都松山市の北西20Km、広島県呉市から40Kmの位置にあり、山口・広島の両県境に接しています。行政区では温泉郡中島町に属しています。周囲約8Kmで東西約4Kmと細長く、一文字の如く伸びていて、面積は2km²。一番高い山は米山の184m。周囲には、由利島・小市島・中島・横島・鴨背島などの附属無人島を有しているため、海域は町内で一番広く、昔から漁業に力を入れていたことがわかるような気がします。

元来、忽那氏の支配にあったものと思われ、「忽那嶋開発記」によりますと、藤原親朝が寛治年中（1087～94）に開発した6島中の1つと記され、中島（忽那島）の属島的な支配を受けていたようです。

その後、前述したように山口県豊田郷から豊田（二神）種家が島に入ってから水軍の根拠地としての存在が印されます。南北朝の動乱を経て二神氏は勢力を増していき、幕藩体制の敷かれるまでの約300年間、この近海で忽那氏、村上氏などとともに河野氏の配下として活躍したのです。

天正十三年（1585）河野氏の滅亡後、二神氏はそれぞれの道を歩むことになりますが、二神島では家種が現在に至るまでの島の礎を築くこととなるのです。

【二神家墓地、家種の墓を発見】

二神島フェリー・高速船発着場のすぐ南に安養寺があり、その裏手急傾斜の小高いところに、600年以上にわたっての墓石が並ぶ二神家墓地があります。面積は692m²（約210坪）。墓石の固体数は113（平成8年3月神奈川大学日本常民文化研究所・東国歴史考古学研究所調査報告より）を確認しています。

網野善彦氏によると、この二神家墓地は、中世から現代まで一族の墓が途切れなく続いて1つの場所にあるということが全国的にも珍しいものであるそうです。そのうえ、系図と過去帳によってお墓が確認できるというのは希有のことだとのことでした。

神奈川大学日本常民文化研究所と東国歴史考古学研究所による二神家墓地調査は、平成7年（1995）7～8月、平成8（1996）年3月、平成9（1997）年3月、平成12年（2000）3月の4回行われています。その中でも、平成12年の調査では大発見がありました。

それは、天正13年（1585）河野氏が滅亡した後、二神島に帰り、その後の島の繁栄を築いたとされている二神家種の墓が発見されたことです。今まで、家種の長男である種長以降の墓は確認ができていましたが、家種については二神家の過去帳で「一の段に葬る」と記載があるだけで、確認はできていませんでした。

一の段に前々から気になる家形の墓がありました。二神家の過去帳で家種の後妻である「閑秋院月山妙清大姉」のところに「廟西畠一の段葬宗清同処明堂有之」と書かれていました。宗清は家種の法名ですから、「同じ場所に宗清の明堂がある」ということになります。ならば「明堂」は家形の墓ではないのか」ということで、内部にあった一石五輪を取り出して拓本をとって確認したところ、見事に『宗清』の文字が浮かび上がったのです。それによって、近くにある小さい家形の墓は、家種の後妻であるということもわかったのです。

家形の墓は全国でも見られます。愛媛県内でも伊予市・丹原町などを初め、何ヶ所かで見られます。家形の墓は、「初祖」的な意味を持つものではないかと考えられています。



一の段にある家種の墓と確認された家形の墓

【二神家文書】

二神家に蔵していた古文書で、室町後期から江戸時代に至るもので歴史的にも貴重な史料です。中島町は昭和43年10月に町の有形文化財に指定しましたが、現在は、神奈川大学日本常民文化研究所で所蔵しています。

内容は、伊予の大領主であった河野氏と風早地方に勢力を保持し後に二神島に渡った二神氏との間に取り交わされた安堵状、任命、親任状が主文で、上下合わせると41通記載されています。

この中には、天正の頃の大洲城主であった戸田民部少輔勝隆よりの検地条目もあります。この条目は、前記した書状とは趣を異にしたもので、藩主・庄屋・農民の間を厳しく規制していました。このころの文書としては、情味あふれる内容となっていて珍しいものかもしれません。文書に綴っている書状は、文明13年(1481)から天正15年(1587)の間に出されたものです。

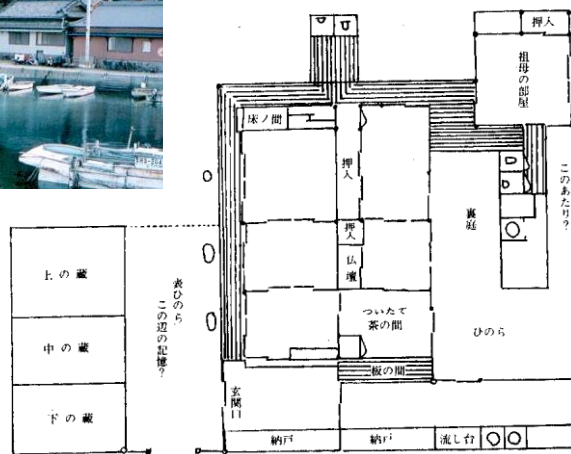


【二神島庄屋屋敷】



本浦にある現在の二神家の敷地は200坪余りですが、かつては1200坪あったといわれます。生前、二神司朗氏より伺ったところでは、司朗氏が小学校6年生頃(大正9年頃か)屋敷

地を売却し現在の敷地になったということです。今も、屋敷内にあった井戸が残されており、近年までは島内に9つあるという共同井戸の1つとして利用されていました。



現二神家当主二神司朗氏の記憶に残る二神家の屋敷図

その井戸の近くで安養寺が元あったと言われる場所のお宅が家を新築する際に掘り起こしたところから五輪が出てきており、その一部は安養寺に置かれています。ひよっとしたら、今でもまだ、埋もれたままのものがそのままということも考えられます。将来、発見される可能性に期待したいと思います。

庄屋屋敷とまではいきませんが、二神島にかつてあったといわれる家に、「あたらしや（新屋か）〈二神氏〉」や「大向井の家〈黒子氏〉」などがあります。これらの家のことについては、次の機会にしたいと思います。

【安養寺】

安養寺の過去帳の冒頭には、次のように記載されています。

「当山開基及古住僧由緒共、寛延四年（1751）又宝暦六年（1756）再度焼失付吉代不依之鏡栄法印記之」と記載されており、創建の記録は定かではありません。



また、明治十一年（1878）の『伊予國風早郡地誌』に「安養寺真言宗温泉郡石手寺の末派なり。境内東西二十六間南北七間壱尺、面積百九十五坪、村の中央本浦にあり。開基創建年月不祥、宝暦中堂宇火災あり僧鏡栄中興す」とあります。開基年はわかりませんが、『豊田二神嫡流系図写』に「二神家真は二神安養寺開基」となっており、家真が15世紀の人物であることから中世起源の寺院と推定されます。

一方、『温泉郡誌』には「創建は寛延四年（1751）檀徒136戸」と出ていますが、二神家の過去帳や寺伝によると寛延四年に火災に遭っていますので、『温泉郡誌』では、その時からを創建年としたのかもしれませんが。また、寛延四年の仲秋上旬には『二神嶋八幡宮傳記』が書かれています。

当寺は「妙見山安養寺」と号し、真言宗豊山派で総本山は奈良県豊山長谷寺です。本尊は阿弥陀如来（鎌倉時代）。脇仏は観音菩薩、勢至菩薩（弥陀三尊仏）で安政六年（1859）に修理をしています。それと歓喜天（聖天）とがあります。

寺宝は、400年前桃山時代後期に作られた「涅槃掛図」と「大般若経六百卷」があります。「大般若経六百卷」については、宇佐八幡神社に保管されていた時期もあったようで、そのおかげで火災から守られてきたのかもしれませんが。

安養寺再建に関する説には、松山城初代藩主加藤嘉明から、松山

城築城の節（1573～80）二神島より松材の献納を命じられます。二神氏は「松島」の名に恥じない立派な松を献上しましたが、余材が出たので払い下げを受けて再建。

寛永十九年（1642）松山城を改築した時の用材で本堂を建立？寺伝には寛延四年（1751）、宝暦六年（1756）の火災で寺宝、古文書を焼失し、明和二年（1765）松山城を改築した時の用材で再建。そして、明和七年（1770）一月、二神藤右衛門尉が仏像、仏具を寄進し再興。とあります。

近年では、安政四年（1857）10世蘭秀和尚の代に於いて修復された（どの部分の修復かは不詳）と過去帳にはあります。そして、平成6年10月の屋根瓦ふき替えを島人総出で行っています。その時に建築年の記載があるかどうかをみんなで探しましたが確認できませんでした。

現在の水崎章元和尚は、松山市石手「地藏院」住職との兼住となっており、初代鏡栄和尚よりすれば18世となります。

※現在の安養寺 二神甲640番地 894.45㎡

【大般若経六百卷】



安養寺の中に入ると、正面のご本尊をお祀りしてある本殿の両脇に大般若経六百卷が4つの納経箱に納められています。箱は、高さ2尺2寸(66cm)、横約2尺(61cm)、縦1尺5寸(45cm)の大きさで、外側には「永享六年(1434)十月吉日」の銘があります。

六百卷は各巻共通ではなく、ページ数も50～60ページとなっていて、書体においても草書・楷書・行書ありで一様ではありません。この大般若経で価値ある点は、全巻が肉筆により完成されているところであろうと思います。

網野善彦氏によりますと、大般若経100～200巻は来島した

ときに持参したもので、残りの巻は後に至って書き足したもののようです。書体より推すところでは2～3人が何年かかけて完成したものだということです。

大般若経について、二神島内では、次のような伝承が残っています。「いつの頃か、いずれの地から来島したのか、1人の遍路が二神島に見えたので、庄屋職であった二神氏はいとおしく思い、同家に起居を許したところいつのまにか、二神庄屋家の娘さんと仲がよくなり、ついに二神島へ定住し、大般若経の残巻を完成した」と。

このお遍路さんは「三月様(さんげつさま)」というお方で、今でも安養寺に墓地があるということです。また、安養寺から西500mにある山腹に三月様をお祀りした祠があります。この三月様と宇佐八幡神社から東200mのところにある荒神様には、毎年秋祭りの時に幟を立てています。三月様は、二神家(現・二神林太郎宅)と角谷家(現・角谷長男宅)が交互に、荒神様は豊田家(現・豊田繁昌)がそれぞれ受け持っています。

「三月」という人物については、『二神氏末家之次第』の中に見ることができます。二神家種の三男種末の娘さんの記述にこうあります。「嫁宇佐三月此三月者豊前宇佐社職タリシカ二神嶋来テ居住ス」とあります。これによれば、三月は家種の孫娘の婿ということになります。いろんな人の手によって「大般若経六百巻」は完成されたということになります。

大般若経六百巻のうちの主なものを次にあげてみます。

◎久安3年(1147) 12月 5日 書写(280巻) 1本あり

◎元徳2年(1330) 6月 27日 二神嶋住人沙弥法善を願主とし て二神嶋浦御堂に於いて経を書写す。

同年閏月日まで書写続く。執筆僧信鏡。

◎貞和2年(1346) 2月 30日 願主沙弥法善、僧道蜜、二神島 八幡宮御前にて修復し終える。

※貞和は北朝年号、南朝年号では正平1年。

◎延文6年(1361) 卯月 14日

※延文は北朝年号、南朝年号では正平16年。

◎永享3年(1431) 3月 27日 二神長門守藤原家経願主となり 僧阿順に一部を写経せしむ。

◎永享6年(1434) 10月 11日 箱2つを作成。二神家経大般若 経を二神嶋八幡宮に納む。

【妙見山】

二神島は北側と南側から見ると、まるでラクダのこぶのように二つの山があります。その2番目に高いのが妙見山174mです。その妙見山中腹に妙見大権現を祀る社があります。二神氏が永正年間（1504～21）に開山したとされています。航海安全・豊稔豊漁を授かる神として島人に崇拜され続けています。



言い伝えによりますと、「当初は妙見山の頂きに祀られていましたが、神威がことのほか強く、沖に行く船は帆を下ろして拝礼をし、もし怠ると航行不能になったので、中腹に遷座し奉ったところ、その後の船の航行は平穏になった」ということです。

「妙見」は元来菩薩の名前で、その実体は北辰（北極星）のことです。妙見神像は龍蛇を使者とする形から、蛇を鎮めるとするのが一般の習俗のようです。

妙見大権現は女神で、同性に嫉妬するということで、二神島の妙見社では今も女人禁制です。女性は、鳥居をくぐったすぐ近くにある女神様（おんなかみさま）の祠で参拝します。二神氏によって開山されたのを裏付けるかのようにその祠の瓦には、二神家の紋「丸に一文字」がくっきりと見て取れます。男性は、女神様からさらに石段を昇ったところにある本殿まで行くことができます。本殿は平成元年に、島内外の信徒による浄財と労力によって新築されました（その前の改築は大正時代に行われています）。

かつて、旅に出る時をはじめ、正月や宇佐八幡神社の秋祭りには妙見様に参詣しご利益を祈念していたものですが、今の時代にそういう光景は見ることはできません。特に秋祭りでは、神輿のお守りをする若者はこぞって港で潮ごりをして身体を浄め、宇佐八幡神社と妙見様に参詣して安全祈願をしていました。

この他、妙見に関する次のような伝説があります。

①昔、妙見様の金仏を盗みアラレが浜から船で運ぼうとした泥棒が動けなくなり、そこへ金仏を放り出して逃げてしまいました。そのとき金仏の片腕が折れたといいます。（この金仏が何で、どこにあるのかは不明です）

②昔、大蛇が住み山を七巻半取り巻いて、アラレが浜で水を飲んでは人々を驚かせていました。島人はその害を受けるのを恐れてお祀りしたということです。大蛇の祟りを恐れ、妙見神社の神事として藁を束ねて大蛇の形を作り、竹矢でこれを封じることが毎年とり行うようになりました。宇佐八幡神社内に藁を束ねて大蛇のようにとぐろを作り、矢を立てたものを祠堂の中にお祀りしています。その関連でしょうか、今も秋祭りで2年毎に甘酒を作り、島人にふるまう行事が残っています。

③なぜか妙見様は犬と雉が嫌いだということで、二神島には一匹もいなかったと言われていますし、犬は飼わないことになっていました（今はそうではありません）。

なぜ、妙見様は犬と雉が嫌いなのでしょう。犬について、こういう仮説はいかがなものでしょう。神様は四足を嫌うということもあるようですが、犬がいなければ、猫が鼠を捕まえます。そうすると鼠がいなくなり蛇はおとなしくなります。ところが、犬がいると猫が恐れて鼠を捕まえなくなります。すると鼠が増えるので蛇が動き出します。だから、蛇を鎮めるのに犬を飼わなかったのでは？。

それと、犬（戌）と雉（酉）は方角でいうと、おおよそ西と北西方向になります。それは、二神島からみるとその方向には山口県の豊田郷があります。関連はないのでしょうか？。

【宇佐八幡神社】

二神島の2つの集落のほぼ中央に、約30mの小高い丘があります。170ある石段を登りきったところに社があります。登り口の鳥居の両側には立派な狛犬があり、裏側には次のように記されています。



明治三十五年十一月五日北米合衆国に渡米昭和二年十二月三十日帰国祈念 二神村人氏子 中本淳一 妻ハルエ

御社に登る参道は、幅約4mの一枚石の階段になっています。この鳥居のところから110段あり、途中6合目あたりで右折し、さらに60段登ります。登り詰めた石段の両脇には立石があり、

寛政四年九月献主 当村魚屋七兵衛

と記されています。魚屋七兵衛が、江戸時代後期に二神島周辺の海域より水揚げされる魚介類を生きたまま大坂まで運搬する生魚の集荷販売業を営み、財をなしたので寄進されたもののようです。

文化、文政、天保年間の『安芸忠海江戸屋の御客帳（羽白家文書）』に、「文化十五年十二月一日松山（ふたかみ）魚屋七兵衛濡米直入

被成候」及び「子一月五日二かみ魚屋七兵衛米積御出(年代は不祥)」とあります。これによって、魚屋七兵衛は実在していたことが確認できます。魚屋七兵衛については、これ以外のことについては不明です。魚屋七兵衛以外で御客帳にある二神島の船主名に「あみや長九郎、扇屋長左衛門、長太郎(文政年間)」、「金七、平六(年号不明)」があります。

言い伝えによりますと、魚屋七兵衛の家は二神島の集落の東「脇の浜」にあったそうです。

さて、宇佐八幡神社はいつ頃の創建なのでしょう。

社伝によりますと、嘉保2年(1095)に完成したとありますが明確ではありません。

それともう1つ、現在の宇佐八幡神社の神主は津和地島の桑原氏が兼務をしていますが、その桑原家の文書に次のような記録があります。

宇佐八幡宮 伊予國風早島二神村鎮座 祭神 応仁(神?)天皇 神功 皇后 三女神 勧請 嘉保二乙亥年
--

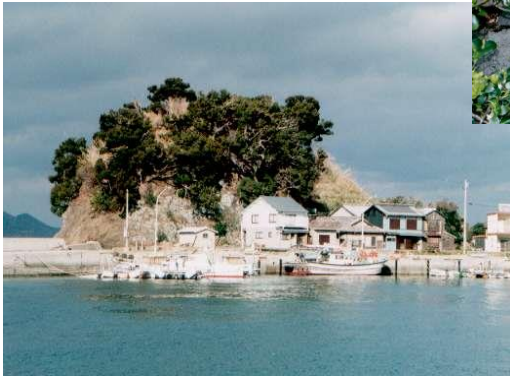
この記録によりますと、前述した社伝や「忽那嶋開発記」にある忽那親朝が各島に八幡宮を奉還した年代と一致はします。

安養寺にある大般若經の奥書によりますと、元徳二年(1330)閏六月二十七日及び二十九日、貞和二年(1346)二月三十日に經卷を施入しています。そして「二神島住人沙弥法善、於二神島八幡宮御前修復」と書かれていますので、二神八幡宮がすでに建立されていたことがわかります。※法善→二神吉種

その後の再建について、平成7年(1995)に神奈川県日本常民文化研究所が二神司朗家文書の調査時、寛延四年(1751)仲秋に書かれた『二神島八幡宮傳記』が出てきました。その中の最後のほうに「天文四乙未年(1535)和泉守種親同右京進再建神殿」とあります。この人物は誰なのでしょう、今後の調査に委ねたいと思います。

【城山(じょうのやま)とお首の家墓】

城山



お首の家墓



二神港入り口には城山（じょうのやま）と呼ばれる高さ15mほどの岩山があります。根周り1m程度のビャクシン数十本が一ヶ所に群生・自生し、県下では例をみない林相を形成しています。それで、昭和29年11月24日愛媛県天然記念物に指定されました。頂上は階段状になっているようにも見受けられ、見張り場があったとしてもおかしくない形態をしています。足場でも組めば庄屋屋敷や近辺の島々は手にとるように見ることができます。ここは宇佐八幡神社地で、ここから島の尾根づたいに見事な松が植わっていて、別名「松島」と呼ばれていました。

城山と墓地との間の細くなった地点を、人の頭と胴体をつなぐ“首”に見立てて、昔から「お首（おくび）」と呼ばれています。六地藏尊がすぐ横にあり、崩れかけてはいるものの、本浦の二神家墓地の一段目にある二神家種と同じ家形のお墓があります。家種のよりも一回り大きいので、父親の通種のものではないかという考えもあります。そうであったとしても、なぜこの場所にあるのでしょうか。

- 参考文献 「中島町誌」中島町
「中島町誌史料集」中島町
「妙見を訪ねて」浜本孫行
「海道をゆく」愛媛県歴史文化博物館
「ふるさと探訪」中島町文化財保護委員会
「二神氏末家之次第」二神文書

/ /

.....

二神 重則



吉木二神氏

吉木は中島本島（忽那島）の北、西中島と呼べれ海に面したりとこ
ろにある。中島が町営バスを降るのと、農協のミカン屋根が見え、神社
の石塔に種の付いた名前がある、

系図によると戦国末期に活躍した通範の曾孫に種長・種興・種末と居り、種末の子として溝田家より重久が来て二神に改めたのは天正～慶長の頃と思われる。吉木二神氏の活躍はそれより少し前、天正10（1582）年に二神修理進重成は河野・毛利と敵対する来島通総の配下として活躍している。1)

神注の二が係りかけ、の関氏性にか、分の友地域に、大氏大地明る。2) や神名い、書二大の期、文の国と戸を、家木戦と江を、神吉の氏上職、二町(豊島村。山島後)の社、片中(豊島)の、は、山分の来わ、書片大予か、文市は芸う中、る北にやが、て、の書大動中、かいて文の活や、書いて、州の役、がった、九し屋、躍残ま、ら民の、活も。り、の、このに。あ、海、そ、文、家、

最近まで、重久の子種正は若くして医師となり全国を回ったと言ひ伝えられていて、随庵と呼ばれ、吉木にあった彼正の墓に溜まった水をつけると、いぼが治るとの言い伝えがあった。系図には彼が堺に

十二神将を置いたと書かれているが、場所などは不明。

二神氏系図

通範一家種一 種長
種興
種末一 種世
半兵衛
重久 一

種信 一 ①

種直

種平 一 ②

種満 一 ③

一 重久 一 種正 一 種次 一 種房 一 種義 一 種因 一 種範 一 種忠 一

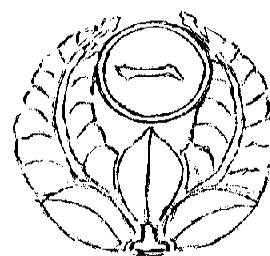
種治 一 ④

溝田氏系図

重成 一 重國 一 重忠 一 重久 一

上がり藤、丸に一の字

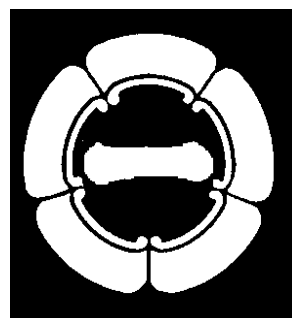
③の種満の子孫にあたる、北海道札幌にお住まいの二神種臣さんからのお便りによりますと、父上が眼科を営んで居られて北海道には大正5年移られた。種臣氏のご兄弟は男5人女3人だそうです。東北と北海道に二神さんは少なく、種臣さんご兄弟が東北や北海道各地に居られる様子です。



瓜輪に一の字

②の種平の子孫に当たり、現在も吉木にお住まいの二神雄彦さんは、戦中戦後の吉木での二神さん達の生き証人です。今回も吉木の取材にあたり大変お世話になりました。もっともっと聞かなければならない事があるような気がするのですが、なにを聞くべきなのかそれが分かりません。

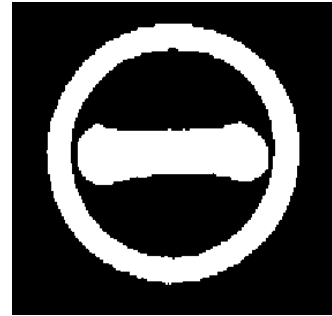
吉木の墓はむかし海岸の砂浜の上にあったそうですが、現在は護岸とアスファルトの道が出来て、その山側にあります。



④の種治の子孫は、風早（愛媛県温泉郡）の島嶼部で現在も神職を続けられている人達がいいます。吉木の五十鈴神社の重分さんや会の監事をお願いしています良昌さんとお父上の通訓さんです。東京大学史料編纂所に種方氏所蔵だった二神系図の写しがあります。残念なことです、吉木二神文書は現在失われてありませんが、同史料編纂所に写し、また県史にも掲載されています。

五十鈴神社の宮司の三男として生まれ松山市の宮司となった順三郎さんと、その兄種恵さんの事を書かなければなりません。紙面が許しません。昭和十九年に起こった「鴨緑丸事件」のC級戦犯として捕らえられた順三郎さん、裁判で時勢に無力な一市民として証言に立った種恵さんそれぞれの心はいかばかりであったでしょう。詳しくは、「巣鴨プリズン13号鉄扉」上坂冬子著（新潮社刊）「だから死んでもいいとは言わぬ」を見てください。3)

丸に一の字

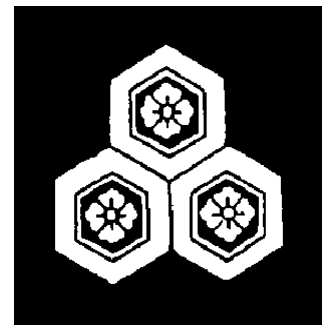


級戦犯として捕らえられた順三郎さん、裁判で時勢に無力な一市民として証言に立った種恵さんそれぞれの心はいかばかりであったでしょう。詳しくは、「巣鴨プリズン13号鉄扉」上坂冬子著（新潮社刊）「だから死んでもいいとは言わぬ」を見てください。3)

①は私の家系で会員には名古屋の二神弘さんと甥の種昭・種弘さん、私の従兄弟で本家の種忠氏と俊夫氏とたくさん居まして、私どもの代や先代までは名前に種が残っていましたが、子の代に残っているのでしょうか、名前文化の面で残念なことです。またこの系も戦争という時代の波は押し寄せてきました。4)

弘さんの兄上種徳さんは、勤労働員で山口県光市に赴き昭和20年1月病死、次男弘氏ご自身は陸士を出た後昭和15年飛行機に乗っていて後続機に追突され右下肢切断。弟季種氏は海軍の戦闘機乗りとなり、あのガダルカナルで戦死、四男の勝氏は海兵を出て戦闘機乗りとなってレイテ島オルモック湾にて戦死。昭和32年10月15日付け新聞には、飛び立つ前の勝氏が映ったニュース映画を見た両親の記事があります。

三盛亀甲に花角



前出の順三郎さんや弘さん兄弟、系図に名前が出ることは殆どない、出ていても女としか表記がない母達の痛みはいかばかりであったろうか……。



吉木の沖合より

疑問点

資料 1) では、二神修理進は二神重成で吉木二神氏となっている。
東大史料編纂所の吉木二神系図や二神種忠氏所蔵の溝田氏系図を見ると、重成の孫の重久のところに二神氏改と記されている。

- 1) 大山積神社関係文書 伊予史料集成第5集 景浦勉氏編
「二神家文書・二神氏の出自とその動静・二神家文書について」
- 2) 瀬戸内海の研究
島嶼の開発とその社会形成－海人の定住を中心に
未来社刊 宮本常一氏著
- 3) 償いは済んでいる 講談社 上坂冬子氏著
- 4) 松山空港物語 (株) エス・ピー・シー西日本出版販売
高田 英夫氏著

系図関係

吉木二神系図 東京大学 史料編纂所
二神系図・溝田系図 二神種忠

氏所蔵



連載 二神氏と苗字の歴史 第2回

事務局長 二神 英臣

前回は、明治新姓令が出された前後の苗字の歴史について見てきましたが、今回はいわゆる苗字の公称を許されていなかった江戸時代の二神氏の中で、苗字を公称している事例について具体的に見てゆきたいと思います。

1 客二神氏の事例

客二神氏は幕末、明治初期に伊予国風早郡粟井郷客村(現在、愛媛県北条市客)に住んでいた二神氏のことです。現在では二神要氏の一族が住まわれています。その客二神氏の墓地は、同家の横を山手の方へ少し登った小高い丘の上、客の部落を見下ろすように建っています。また、菩提寺は真言宗蓮福寺となっています。客二神氏の墓石で確認できる最古の年代は元禄三年の人物ですが、これらの中に、江戸時代の安政6年に没した人物が二神姓を墓石に刻んでいるのが確認できます。墓石の表には「本然浄心居士」と戒名が夫人のものと共に彫られ、その横の面に「二神勘左衛門、夫婦 安政六年未五月十八日」と明確に刻まれています。この客二神氏は江戸時代には農民階層で代々勘左衛門を襲名していますが、いわゆる苗字の公称を許されていた階層には属していませんでした。また歴代庄屋の任に当たっていた事実もありません。

その客二神氏が、幕藩支配が緩み始めていた幕末の安政時代とは云え、なぜ御法度の苗字の公称の方法の一つである、墓石に「二神姓」を刻んだのでしょうか。当時の状況下における苗字の公称の方法は1 表札を掛ける。2 墓石に彫る。3 過去帳に記録する。4 手紙に苗字を記入する。などでした。

客二神氏は、この地域を二神氏の代々に歴史的に安堵された事実からしてその土地の維持、管理の任に当たっていたのではないかと推測されます。古文書に残るもっとも古い二神氏への安堵判物は、河野教通から

二神四郎左衛門尉(家直)に出された文明 11 年(1479)12 月 13 日付のもので、それによれば客二神氏が住む周辺地域三箇所(安岡、友兼、宮崎)の地名が記録されています。(別項「二神古文書の解説」参照)



安政六未五月



二神勘左衛門

この三地域はその後永正 17 年(1520)10 月 26 日河野通直から二神藤二郎へ、天文 11 年(1542)3 月 28 日河野晴通から二神弥五郎へ、天文 14 年(1545)6 月 16 日河野通直から二神兵庫助(弥五郎)へと継続して安堵されており、この時代にこの地域に存在した二神氏のうちの一系譜として客二神氏の調査は引き続き注目されるところです。

2 中西二神氏の事例

中西二神氏は幕末、明治初期には伊予国風早郡正岡郷中西外村(現在、北条市中西外)に住み、藩政時代は農民階層として明治期を迎えました。同系譜の菩提寺は真宗本願寺派の定秀寺で、墓地は中西外の南端の小高い丘陵北端にあり、ここからは先祖の故郷二神島や宅並城、高穴城、鹿島城、恵良城など二神氏と縁のある城跡などが望めます。中西二神氏の過去帳で確認できる最古は享保13年の人物ですが、同氏墓地にはこれらの方々が眠っています。(写真)その中で幕末の嘉永7年に没した人物の墓石に二神姓を彫っているのが確認されています。墓石には「釋量山壽晴居士」とあり右側面に「嘉永七寅年八月二十五日 二神宗右衛門」と彫られています。嘉永7年と云えばペリーが再来し、日米和親条約が締結。吉田松陰が逮捕され11月には安政と改元。幕藩体制へのゆさぶりが始まろうとする頃で、いわゆる安政の大獄はこの4年後に起こりました。同氏の墓地で二神姓が刻まれた墓石はこの一例だけですが、いくら幕藩体制にヒビが入り始めた時期とは云え、親藩の松山藩領であったこの地域で姓を公称すると云う事実は他に何か理由があったのか、他の氏族を含めて中西二神氏のさらなる調査研究が求められます。



全国的には多くの事例が・・・関口先生

このような苗字を墓石に彫って公称すると云う事例は全国的に見てどのようになっているのか神奈川県日本常民文化研究所特別研究員の関口博巨先生に伺ってみますと「全国的には多くの例があります。関東地域でも墓石に苗字を彫り込んでいる家は許可されていない町民、農民問わず多くの事例があり、寺社への寄贈等を含めて枚挙にいとまがありません」とのことでした。

江戸幕府の法度からして苗字を公称出来るのは、一、郷土のように由緒があって以前から苗字を許されたもの。二、褒章として新たに認められたもの。農民の徒党・強訴をつかんでお上に訴えた場合や、孝行、貧民の救助、献金その他の奇特の行為をなしたるもの。三、町年寄、庄屋、名主、御用町人、宿場の本陣などの役についている場合。などでしたが、客二神氏や中西二神氏にも歴史のなかでこの様な事例があったのかも知れません。

いずれにしても室町時代の苗字の普及は日本人が苗字を用いることを希望していたことの証ですし、徳川幕府が幕藩体制を強化する目的で禁止した苗字の公称も幕藩体制がきちんとされていた時代は守られていても、幕末にはそれが崩壊していった。と云うのが歴史的な経過ですし、全国的には幕末には農民の苗字公称を求める動きが起っています。
(『名字と日本人』武光誠著・文芸春秋社刊)

こうして明治維新を迎え、前回で報告した明治新姓令へと続いてゆき、国民全員が一斉に苗字を公称するようになってきます。それまで苗字を名乗ることを控えていた各系譜の二神氏も例外ではなく様々な歴史的経過をたどりながら表札を始め墓石などへの苗字の公称を実行してゆくことになります。

***各系譜の二神氏でこの様な事例があればお知らせ下さい。**

連載

二神古文書の解説

第1回

事務局長 二神英臣

今回からいわゆる「二神文書」と呼ばれている本島二神氏等に伝来してきた古文書を始めとして片山二神氏、土井二神氏、など各二神氏の系譜に伝わってきた古文書類について、その解など各二神氏がそこに記述された地域を訪ね、その文書が語る内説や時代背景について説明し、皆様方とともに考えてゆくためのコーナーを企画しました。

第1回目には「二神文書」と一般に云われ本島二神氏に伝わる古文書の中で代表的な「安堵判物」について取り上げてみました。

第1号

河野教通安堵判物
粟井安岡名、同友兼名、宮崎分等之事所宛
行也
任当知行之旨、不可有相違状如件
文明十一年十二月十三日
刑部大輔(花押)
二神四郎左衛門

第2号

河野弾正少弼通直安堵判物
粟井安岡名、同友兼名、宮崎分之事、後善
応寺
殿判形任、当知行之旨、不可有相違之状如
件
永正十七年十月廿六日
通直(花押)
二神藤二郎殿

第3号

河野晴通安堵判物
一 所 安岡分事
一 所 宮前分事
一 友包入地事
右早任先例之旨、進退不可有相違之状如件
晴通
天文十一年三月廿八日
二神弥五郎殿

第4号

河野弾正少弼通直安堵判物
充 行
一 粟井庄安岡分之事
一 宮前分之事
一 友包分之事
右前々任本知之旨、所令還補也、早進退領
掌不
可有相違之状如件
天文十四年六月十六日
少弼(花押)
二神兵庫助殿

安堵判物

「安堵判物」(あんどはんもつ)と呼ばれるこれらの古文書は歴代の河野氏から二神氏に出されたもので「安堵」とは土地、建物などの所有権、領有権、知行権などを確認あるいは承認すること、領主が御家人などに与える御恩として行われました。

そして「判物」とは古文書の様式のこと、室町、戦国時代以降、幕府や領主が書判(花押)をもって所領の宛行いや安堵を行なった文書を云います。

上記に紹介した4通の安堵判物は約70年間に渡って粟井郷の安岡、友兼(友包)、宮崎(宮前)の三地区を二神四郎左衛門(家真)、藤二郎、弥五郎(兵庫助)にそれぞれ安堵したことが理解出来ます。

第1号にある発令者の刑部大輔とは河野教通のことで、二神四郎左衛門とは種家から数えて四代目で小川村宅並城に拠った二神家直のことを指しています。この安堵判物が出されたのは、河野教通の時代で、教通は応仁の乱以降西軍の山名氏側に属して活躍しました。

文明11年阿波国の細川義春が伊予侵入を企てた時、二神家直は南、忽那、重見氏等と協力して小川村の宅並城を防備。さらに細川義春は東予の世田山城に河野通世を攻撃しましたが、河野氏側はこれを撃退。細川氏は讃岐国へ退散しました。

二神家直のこの時の戦功が、後に粟井安岡名、友兼名、宮崎分を宛行われたものと見られます。

第2号は同じ地区を41年後に河野通直から二神藤二郎に下したもので、それまでの所領をそのまま藤二郎に相続させています。しかしながらこの時代の二神系図には二神藤二郎(左馬助)と云う名前は確認できておらず、どのような人であったのかについては不明のままですが二神氏の中で重要な人物であったことには違いないと思われます。

第3号はさらに22年後の天文11年3月、河野晴通から二神弥五郎(兵庫助)宛に同じ地区を引き続き相続させたものです。友兼が友包、宮崎が宮前となっていますが同じ所のことです。安岡、友兼、宮崎が二神氏にとって重要な拠点であったことを考えますと、弥五郎は藤二郎の後継者と考えのが自然ですが、この弥五郎(兵庫助)についてもこれまでの二神系図の上からは確認できていません。

第4号は3年後に河野弾正少弼通直から兵庫助(弥五郎)に対して出された先の三地区を還補する旨の安堵状ですが、河野通直の後を河野晴通が継承したものの晴通が早世したため再度通直名での安堵状の発令となったものと考えられます。
(参考文献『二神文書』景浦勉著伊予史料集成

刊行会)

このように河野氏から二神氏へ四回に渡り安堵された重要な地域、安岡名、友兼名、宮崎分とは一体どここのことを指し、現在どのようなになっているのでしょうか。愛媛県北条市栗井地区内に同じ地名として現在も存在している三箇所を訪ねてみました。

安岡(やすおか)



現在の北条市安岡は行政の最小単位の地区で、栗井川下流域の南側にあり周辺の地区、常竹(常竹二神氏発祥地)河原、久保、和田に囲まれるように位置しています。藩政時代に作られたため池は栗井川流域に多くありますが、二神家直の時代にはこのあたり一帯を栗井郷と呼び栗井川の水を利用しての農業と、目前に広がる瀬戸内海に海の幸を求めての日常生活が送られていました。おそらく海岸線は現在よりも可成り山手側へ上がっていたものと思われ、栗井川が押し流す土砂によって500年の歴史のなかで今の姿になったものと考えられます。

友兼(友包・ともかね)



友兼の地名は現在の行政町名にはありませんが、北条市平林と小川谷に跨る地域に友兼の地名が残っています。この友兼も安岡から粟井川に沿って3キロばかり上がった中流域北側にあり、左右から横山城に繋がる山々が迫ってくる地域にあります。農業をするには少々狭くどうしても二神氏に代々この地を安堵したのか直ぐには理解できませんが、中世の戦略上この土地は後述べる宮崎と共にきわめて重要な位置にありましました。即ち、河野氏の居城は既にこの時代には道後湯築城に移っていましたが、南氏の居城横山城への入口に当たり、山道を行けば高縄城へも続いて行けるように、河野氏にとって重要視した地域であることが判ります。

宮崎(宮前・みやのさき)



宮崎は北条市客地区に残る地名で友兼より粟井川にそってさまを宮崎に2キロ程登った上流域で山々が急速に両端から迫ってきまにココサキといふ小い社が建っている。ヤノサキは現在では小い社が建っている。ミは置かれたいまは小い社が建っている。失し現在では小い社が建っている。通らなければならぬの客部落を通過し、粟井川沿いの要所を長期に渡って安堵した。この管理役割を果たし、河野郷へ移動した。衛下に残り、小川二神衆の流れに繋がる一族ではないかと見られす。

会員さんの便り

「二神家の面子と誇りを忘れなかった祖父」

岡山市 黒瀬一朗（76才）

私は岡山市で歯科医院を開業しております黒瀬一朗と申します。私の祖父黒瀬彌（ワタル）が二神家より養子に参られたことは、若い頃父に聞いて存じておりました。しかし、二神島の所在地など詳しいことは何も存ぜず、暇になったらゆっくり探してみようと考えておりました。そんな折の平成十一年十二月初め、中島町役場の豊田渉様より突然電話があり、全く思いがけないことをお聞きして大変驚くと同時に興奮いたしました。

後日戴いた資料により、祖父彌は二神種式様の三男彌三郎（種秀）で、愛媛県越智郡岩城村の黒瀬家に参られてより「彌」と改名されたことがわかりました。彌は大正九年七月に亡くなりましたが、その間江戸時代初期に創業された廻船問屋三原屋の分家、「中三原屋」の経営の傍ら岩城村村長として村の発展に努めました。

祖父彌が二神島の歴代の墓地の名義人として登記しており、そのまま岩城村へ養子として持参したことについて、驚くと同時に不思議さを感じました（現在も、二神島墓地の登記者の一人として「二神彌三郎」とあります）。この墓地が二神家創設以来現在まで約七百年連綿とつづく家系でもあり、歴代の墓が一ヶ所にまとまっておき、系図や過去帳も揃っていて墓石の確認ができるというのは全国的にも珍しいとのことのようですし、歴史的、民俗学的意義のある貴重なものであるということを読みまして一層驚きました。

神奈川大学日本常民文化研究所が、「二神家の古文書の研究と同時に墓地も発掘調査をして、中世からの変遷を研究したいので、ぜひ、「彌直系」の子孫にご協力いただきたい」とのお話でした。私もこの貴重な文化財を発掘することにより民俗学的資料が得られればと、発掘について全面的なご協力を致す旨お返事しました。

年が明けて一月十六日に、日本常民研の橘川所長、窪田研究員、二神家ご当主の二神倫一郎様、二神氏系譜研究会の二神浩三会長、二神英臣様、豊田渉様が拙宅へおいで下さいました。二神家の由来や歴史文書についてお話戴き、墓地の発掘については、私の親族と相談のうえ努力致しますことをお約束し、必要な書類を送って戴くようお願いしました。

私は、「岩城島三原屋会」の会長を仰せつかっておりまして、その時に私の編集しました「岩城島三原屋の歴史と系譜」をお渡しいたしました。黒瀬家も二神家と同じ藤原氏の出自であり、黒瀬家は西園寺家の末裔にあたり源頼朝より伊予国宇和郡を与えられ、宇和西園寺と称せられました。現在の宇和町黒瀬城に居りましたが、豊臣秀吉の四国征伐により家臣の大洲城主戸田勝隆に殺され、一族は離散しました。

私の先祖清兵衛は黒瀬氏を名乗り、江戸時代初期に岩城島へ渡り艱難辛苦の末、ようやく四代目又右衛門に至り「三原屋」という廻船問屋を開き、大正時代まで続いておりました。そして、祖父彌の母（二神鶴代）も二神家より黒瀬専次郎（彌の養父）に嫁していることもお聞きして、二神家と黒瀬家とのつながりの深さを知り、和気霽々とお話しているうち瞬く間に三時間が過ぎてしまいました。後日、必要書類を関係親族に送り、全員が日本常民研に直接返信いたしまして、橘川所長よりお礼状を戴きました。

三月になって二神家墓地の発掘調査が始まり、同月二十日に私と長男、次男が、二神島の発掘現場を見せていただきに参りました。田代所長、河野教授にお目にかかり発掘状況を詳しくお話して戴きました。その墓所で重要な発見を致しました。私の中三原屋の紋章は「丸に一文字」で、本家や他の分家の紋章は「抱き花杏葉紋」なのです。なぜ我が中三原屋のみ違うのか三原屋会でも論議しましたが不明でした。ところが、二神家の墓地に「丸に一文字」の紋章を刻した墓石が散在しておりました。

私も大変驚き、ご当主の倫一郎氏にお聞きすると、正徳（1711～1766）の頃「種永」氏が「自當代定紋所用圈中一文字」と文書に残っていて、二神家の紋章であるとのことのお話。祖父彌は養子に來られる時、二神家墓地の名義と共に紋所も持参せられたのだということで、我が家の紋章の由来の疑問も解けました。彌の、あくまで二神家の面子と誇りを忘れない強い心に感心した次第であります。

以上書きましたように、わずか一年の間に長年の疑問が氷解いたしました。二神・黒瀬両家共藤原氏を先祖とする一族であることが判明したことは、非常に嬉しいことと存じ、今後とも二神家の皆様と交流を深めさせて戴きたいと心から念じ、ごあいさつとさせていただきます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

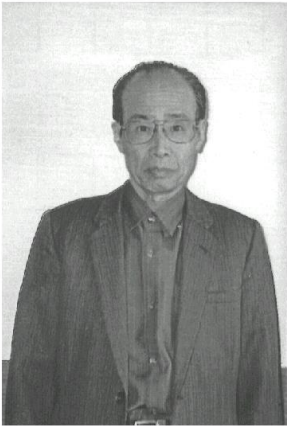


※最後になりましたが、二神司朗先生の立派な画集を送って戴きました「二神司朗先生を偲ぶ会」に心から感謝いたします。

二神島二神氏墓地に立つ黒瀬一朗氏

会員さんの便り

札幌市 二神種臣氏



吉木出身、札幌の種臣です。

私の父種郎は、幼少時代上浮穴郡小田町に住んでいたようです。種信の次男種栄（真澄）の三男で、幼名は真三郎といい、22才で種信の弟種満の孫養子になり、先祖代々種がついていたので種郎と改名したようです。

大正元年岡山医専を卒業し、松本、岐阜、宇都宮で眼科医を勤めていました。その当時北海道は、トラホーム、白内障、風眼等眼病に悩む人が大変多かったので、そ

の土地で開業しようと決意し、結婚して大正5年北海道に渡ってきたといっていました。

我々兄弟は男5人、女3人全員道産子で大正から昭和のはじめにかけて生まれました。

一番社交性のある弟の三男が我々兄弟のまとめ役をやっていましたが平成9年72才で死亡しました。それで私が代わりをやっているわけです。

弟は以前から二神姓に大変興味をもっていました。今から13年前になりますが北海道はじめ全国の個人加入電話帳を調べ29枚にまとめてありました。二神系譜研究会がもう少し早く発足していたら弟も喜んで参加し協力していただろうと思い、今は本当に残念に思っています。

創刊号で特に気付いた点は、写真入りの役員のつぶやきで、一度もお会いしたことがないのに、なんとなく親しみがわいてきます。どうか他の役員の方々のつぶやきも引き続いてのせて下さい。

インターネット 二神氏関連サイトの紹介

常任理事 二神重則

地域情報 行政

愛媛県温泉郡中島町	http://www.town.nakajima.ehime.jp/
愛媛県北条市	http://www.islands.ne.jp/hojocity/shisei/
愛媛県南宇和郡城辺町	http://www.netcrew.co.jp/johen/
高知県幡多郡大月町	http://www.gallery.ne.jp/~otsuki/
山口県豊浦郡豊田町	http://www.town.toyota.yamaguchi.jp/
地域情報 玖珠町商工会	http://www.coara.or.jp/~kusushou/

メディア 愛媛新聞

神奈川大の研究所が二神島調査始める 2000. 3. 9
<http://www.ehime-np.co.jp/arc/2000/dekigot/np-dekigot-0309.html#04>
二神島調査の神奈川大グループが来社 1999. 12. 15
<http://www.ehime-np.co.jp/arc/1999/dekigot/np-dekigot-1215.html#19>
二神島調査で神奈川大グループが来県 1999. 12. 14
<http://www.ehime-np.co.jp/arc/1999/np-dekigot-1214.html#01>
「二神氏」のルーツ調べようと城辺で学習交流会
<http://www.ehime-np.co.jp/arc/1999/dekigot/np-dekigot-0916.html#02>
北条で二神氏のルーツを探る会発足 1999. 2. 18
<http://www.ehime-np.co.jp/arc/1999/dekigot/np-dekigot-0218.html#news19>
しまなみ海人史紀行（6）山流しされた海賊衆 大分県玖珠町
<http://www.ehime-np.co.jp/shimanami/kikaku/kikou/kiko6/kiko6-970302.htm>

戦国武家家伝 二神氏の紹介

<http://www2.harimaya.com/sengoku/html/hutagami.html>
戦国武家家伝 村上氏

http://www.harimaya.com/o_kamon1/buke_keizu/html/mura_kai.html

来島水軍と来島城 <http://member.nifty.ne.jp/kunik/kuru.html>
種が戦死したとされる道後湯築城
<http://www.shikoku.ne.jp/yuduki/>
大内氏と子孫の豊田氏の菩提寺本妙山法善寺を紹介するホ-ムペ-ジ
<http://www.nichiren.ac/houzennji/>

東京大学史料編纂所

<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>

その他関連サイトをご存じの方はご連絡を下さい。

二神修理進について

理事 二神信也



二神修理進については、「室町時代における二神氏の活躍」（景浦勉氏）等の資料で既に紹介されています。その二神修理進について資料を私なりにまとめてみました。

修理進が活躍した頃の伊予の歴史は色々とややこしいので、勘違いしている箇所があるかもしれませんが、大まかな流れは掴めていると思います。

二神修理進とは

室町時代から戦国時代の四国での合戦について伝える南海治乱記には、「伊予の島城…」という箇所では瀬戸内海の島城の城主を紹介しています。能島の村上兵部大夫、（能島の）岸の城の村上河内守、来島の久留島信濃守、因島の村上隼人、興居島の得居播磨守らと並んで、二神島の二神修理進の名前があります。

また、海と水軍の日本史（原書房 下巻 P154）では「予州 能島来由記」「南海通記」六巻に、瀬戸内の水軍の内、能島、院島（因島）は村上源氏、来島、興居島は河野氏であり、河野一族には久留島信濃守、得居播磨守、二神修理進、田坂鎧之助、今岡左衛門尉等であると書いてあることが紹介されています。

「河野分限録」と「伊予国河野古城井寄合衆附」には、河野氏の配下の得居半左衛門通久（風早郡難波村 恵良山城城主）の御旗下組衆

拾六騎に二神隼人佐、孫右衛門、新左衛門尉、和泉守、越後守と一緒に修理進の名前があります。その二神修理進が戦国時代が終わると、来島藩の家臣として九州に移り、豊後守の二神氏の祖となります。二神氏の系図では種良となっている人物が修理進だと思われます。

河野水軍の一翼を担い、歴史書にも河野の海賊大将の一人として紹介されている修理進が何故来島氏の家臣として九州に移ったのか、それを順を追って見てみたいと思います。

河野氏のお家騒動と河野一族の来島氏誕生

基本的に二神家は河野の家臣として活躍しています。しかし、その河野家にお家騒動が起こります。河野家には宗家と予州家があり、両家は反目しあっていました。応仁の乱においても宗家の教通は西軍、予州家の通春は東軍に分かれて戦っています。（但し、文明11年(1479年)に細川義春の伊予侵攻の際には通春は細川氏に対し、教通と共闘しています。忽那氏の活躍が伝えられているので二神さんも頑張ったのではないのでしょうか）お家騒動は、その教通から数えて二代目の通直の代のことでした。

通直には、子がなく、晩年になって村上水軍で有名な村上氏の村上通康を養子とし河野宗家を継がせました。通康は通直の妾腹の娘の夫でした。しかし、家臣の多くは予州家の通政（春通）を推しこれに反対しました。この争いに敗れ、通直、通康親子は湯築城から来島城に逃げます。

結局和議により、通政が宗家総領になり、通康は家臣に降りて来島家を継ぐこととなります。通直、通康親子は湯築城に戻ることが出来ましたが、しこりが残りました。（海と水軍の日本史 下巻 P202）

海賊衆との溝が出来てしまったことが河野氏の滅亡の遠因とも言われます。

こうして通康は河野姓や家紋の使用が認められた、「河野一族の来島」となりました。こうして三島村上氏と呼ばれる村上水軍が二つに

分かれる素地が出来ました。より河野氏に近い立場の来島村上氏とそうでない因島と能島村上氏です。元々は三島とも河野氏の影響下にありましたが、厳島合戦の後因島と能島は毛利に近い立場を取ります。

しかし、来島は毛利になびきませんでした。河野氏とのより深い関係の他にも、以前毛利の為に働いた時、能島の村上武吉がサボタージュした為、来島氏が苦戦する羽目になったことも理由だといわれます。（河野氏の滅亡の際には来島氏は毛利と共に河野氏を攻めています。が、これについては後ほど説明します）その他の村上氏は毛利に近い立場を取り続け、最後には毛利の家臣団に組み込まれてしまいました。

修理進の海賊ネットワーク

南海治乱記によれば「修理進というのは久留島氏（来島氏）の一族で、二神島の領主である。元々河野氏の流れであり、能島と通じて海賊の大將でもあった。修理進の兄は他の家を継いで田坂鑑之助と名っていた。また、舅は岸の城の村上河内守で、我が国でも中国でも名の知られた海賊の兵将であった」ということです。

前述しましたが、村上河内守（つまり来島氏の一族）も田坂鑑之助も河野氏に近い水軍の将です。また、修理進が御旗下衆として使えていた得居通久は、来島通総の兄でした。つまり、修理進は二神氏の中でも来島氏に近い立場にあったといえます。

蛇足ですが、来島氏の城としてしられる鹿島城も来島氏の支配に入るまえは、元々河野氏に命ぜられて鹿島を守っていた忽那氏の後を襲って二神氏が支配していました。（海賊と海城 瀬戸内の戦国史 平凡選書）それが天文年間の頃（1532－1554年）、二神氏が忽那氏から来島村上氏の家臣になった時に、鹿島の支配も来島氏の手に移ったのです。だからそのまま二神氏は城代として鹿島城に入っていたのでしょう。

来島氏と縁が深かった二神修理進は来島通総に従って戦国の世を渡っていきました。河野通直（牛福丸）の命に来島通総（牛松）が従わなかった時に通直は通康と絶交するよう修理進に書を送っていますが、修理進は聞かなかったようです。

河野氏の危機

「通昌の代になって戦いが嫌いな為他の武将から侮られ、領土も端の方から削り取られていった」「天正8年に伊予の宇都宮の家臣菅田直之が河野屋形の出雲守通昌と争って合戦。八幡浜城、鍛冶が城を計略によって攻め落とす」（南海治乱記 中巻 P201）とあります。

河野通昌となっていますが、これは通直のことかもしれません。南海治乱記ではこの通昌が河野家最後の総領となっています。その頃になると正岡氏や重見氏ら家臣が反旗をひるがえし、また讃岐の細川氏や中国の大内氏の侵攻にも河野氏は悩まされていましたが、なんといっても問題だったのは土佐の長宗我部元親でした。

元親は河野氏が毛利氏とも縁組みを組んでいたので、河野と直接対決すると毛利とも事を構えることになると考え、直接的に河野を攻撃するのではなく、宇都宮氏の家臣を使ったり、河野氏の譜代の家臣を寝返らせる作戦を採りました。

来島氏の造反

そんな中、天正7年（1579年）に来島通総と二神豊前守（修理進の事か？）は河野氏に造反し、風早郡の占領を目指しましたが、河野家家臣池原氏南氏の為に失敗し、豊前守は来島に逃れました。（天正9年頃という説もあります）この合戦で二神通範は河野側で戦い、感謝状を貰っています。二神氏も分裂したことになります。そして、天正10年4月（1582年）に来島通総は中国攻めの羽柴秀吉の誘いに乗り、その配下になります。しかし、これは河野だけでなく毛利氏も他の村上氏をも裏切る行為でした。

当時毛利と村上水軍は石山合戦や中国で織田軍と激しい戦いを繰り返していたからです。早速、毛利、河野、村上の連合軍の攻撃を受けることになります。戦闘は5月から始まりました。

途中6月に本能寺の変が起こり、近畿中部の政変がありましたが、合戦は来島から鹿島へ主戦場を移して、長期戦になります。鹿島城の水と兵糧が尽きるのを待つ作戦です。しかし鹿島城合戦は天正11年8月頃終わったようです。秀吉の介入や長宗我部の宇和郡、喜多郡への侵入が原因と推測されています。

そして天正 12 年（1584 年）の冬には来島通総は帰国することが出来ました。この戦いの際、修理進は通総（署名では通昌となっています）から大島での戦いや大浦での戦いについて感謝状を貰っています。（天正 10 年 5 月 19 日）（同年 6 月 30 日）

秀吉の四国征伐、そして河野氏の滅亡

秀吉の勧告も聞かず、元親は四国統一を成し遂げます。お家騒動や家臣の造反、そして隣国からの侵攻に疲れ果てた河野氏は元親に降伏してしまいました。南海治乱記では、この前に河野通昌は来島氏の斡旋で一時秀吉の配下になったとありますが、そうすると秀吉の配下になってからまだ日の浅いうちに元親に降ってしまったのでしょうか。

その代償を河野氏は直ちに払うことになります。秀吉は小早川隆景に伊予平定を命じ、天正 13 年 7 月（1585 年）、小早川率いる伊予平定軍は河野氏の領土に侵攻を開始します。

来島通総、得居通久らも先鋒としてこれに参加しました。日高山城を攻略、城主重見孫四郎通晴を討ち取ります。横山城攻略にも来島勢は先鋒として参加し、城主南彦四郎通具を逃走させました。二神通範以下二神一族や宇佐美、目見田、尾越ら難波衆が籠城していた高穴城は頑強な抵抗を見せましたが、主将隆景自らの手で落城させられました。

当然、二神修理進も来島氏に従ってこの四国征伐に参加していた筈ですが、横山城の南氏は以前戦って敗走させられた相手ですし、重見氏も以前来島氏と戦ったことがあります。（府中石井山城主であった重見因幡守通種は、主君河野通直と合わなかったため、来島通康の討伐を受け、大内氏に走りました。その後陶軍に属して厳島合戦にも参加したようです。海と水軍の日本史下巻 P169）多分来島勢はそれなりに過去の遺恨がある相手の攻撃を割当てられたのではないのでしょうか。

但し、新居軍の合戦で忽那通恭、通実という主を失い、防戦の殆ど出来なかった忽那七島を攻めたのは来島水軍でした。（英臣さんに教えて戴いたのですが、二神氏の系図を見ますと通範は修理進の祖父にあたり、二人がこの合戦で敵味方になって戦ったという記述には二人

の当時の年齢を考えると、多少ジレンマがあります)

小早川隆景は毛利元就の孫娘の嫁ぎ先である河野通直に降伏することを薦めます。天正 13 年 9 月、通直はそれを受け入れ、大名としての河野氏は滅びました。譜代の家臣と共に安芸国竹原に移された通直は天正 15 年に死去しました。秀吉に没収された河野氏の所領は改めて小早川隆景に与えられました。その一部は安国寺、得能、来島氏に分け与えられ、来島通総は一万四千石の大名になり、得居通久も三千石を与えられました。

朝鮮出兵と関ヶ原

朝鮮出兵に来島、得居の兄弟は 700 の兵を率いて出陣しました。しかし、李舜臣に破れ、二人とも討死にしまいました。嫡子が居なかった得居家は取り潰されてしまいました。その後、来島氏は、関ヶ原の合戦には西軍であったため、風早から海のない豊後の森に移封されました。修理進が朝鮮や関ヶ原で戦ったかどうかは調べられませんが、彼の子孫は主君について豊後の森に移り代々来島藩の要職を勤めています。

だから南海治乱記の様な歴史書にも二神氏の中で修理進が何度も取り上げられているのでしょう。また、南海治乱記は、讃岐の豪族の家に生まれ、後に福岡藩に兵学者として召し抱えられた香西成資が記したものです。そういう訳で修理進の資料が手に入り易かったのかもしれない。

終わりに

こうして天下統一への動きの中で武士として生き残る事を得た修理進でした。河野氏から離れた形にはなっていますが、元々は来島の方が宗家だった訳ですし、彼が河野氏を裏切ったとは言えないのではないのでしょうか。むしろ先が見えない時代に敢えて両河野家は別々の道を歩み、二神氏も二つに分かれて生き残りを図ったと考えるべきではないのでしょうか。戦国という時代の厳しさを感じます。

双水執流創始者、二神半之助正聴のこと。

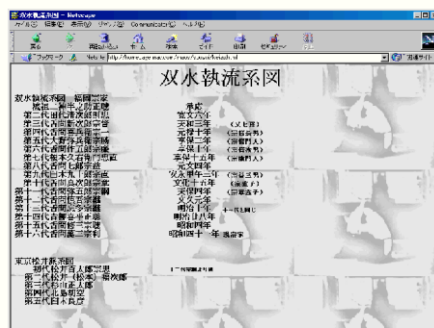
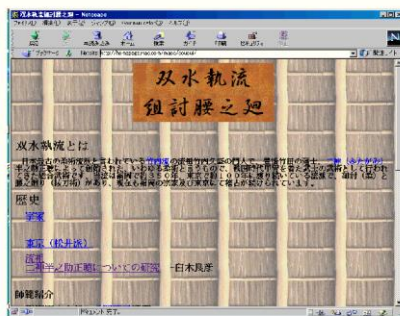
東京にお住まいの佐々木さんのホームページでは、双水執流柔術を取り上げていまして、その創始者が二神氏であるという大変興味深いものです。佐々木さんの了解を得まして、今回紹介させていただきます。

常任理事 二神 重則

双水執流とは

日本最古の柔術流派と言われている竹内流の流祖竹内久盛の門人で、豊後竹田の藩士、二神半之助正聴によって創始された、いわゆる柔術と言うもので、戦国時代甲冑を着た武士の武術として行われてきた総合武術です。当流は福岡で約350年、東京で約100年に渡り続いている流派で、組討（柔）と腰之廻り（抜刀術）があり、現在も福岡の宗家及び東京にて稽古が続けられています。

URL : <http://homepage.mac.com/maos/sousui/>



双水執流流祖

二神半之助正聴についての研究 その一

白木良彦

双水執流の流祖二神半之助の記載されている文章は、舌間家に伝えられている双水執流組討腰之廻略史のみである。そこで、今まで集めた資料を元に二神半之助の実像に迫りたいと思う。

まず最初に舌間家にあるその「略史」を見て見ると、冒頭にこう書かれている。「豊後竹田の藩士にして竹内流小具足腰之廻を学び後一流を興し二神流と称せり、…」となっている。私は常々この書き出しに疑問をもっていた。その部分は「豊後竹田の藩士」と言う部分と「竹内流小具足腰之廻を学び」の所である。現在あらゆる武道関係の書物で双水執流の二神半之助は竹内流の流祖竹内中務太夫久盛の高弟と言うことになっているが、ここの「略史」には竹内久盛の弟子とは書いてない。

また、もし実際に久盛の弟子だとすれば室町末期の少なくとも天正十年頃から文禄四年までに習ったことになる。なぜなら、久盛は文禄四年に九十三歳で没しているからである。さらに、最初の「竹田の藩士」と言う言い方は時が変わって江戸時代になって藩体制が作られてからの言い回し方であるから、「藩士」と「竹内流を学び」は久盛以外の人から竹内流を学んだことになる。ここで、竹内流の文献を調べて見た。（日本柔術の源流竹内流 竹内流編纂委社）すると、竹内流系図に興味深い記述があった。

流祖 竹内中務大輪盛	二代目 竹内久勝	
	二上某 久盛門弟、 竹内流免許、 二上流柔剣	二上半々丞正聡 竹内流印 可皆伝 二上流腰之廻、双水 執流組討腰之廻流祖トナル

（二上は二神の誤記。また、正聡も正聴の誤記。）

これを見てわかるように、竹内家では二神氏が二名いたことになっている。そして、双水執流に改名したのが二人目の二神半之助（丞）であるとしている。また、この系図を素直に読めば二神某が久盛の門人で半之助はその二神某（多分父親だと思う）から竹内流と二神流を伝授されたとなる。私は、このことに着目した。

それは、二神半之助が田代清次郎に二代目を譲った年代が寛文六年であるから、もし久盛の直接の弟子であった二神が田代に伝授した寛文年間には、かなりの高齢であったと考えられる。推定だが百歳前後になるはずである。もちろん、久盛も九十三歳まで長生きしたのだから半之助も長生きしたといっても有り得ない分けでもないが、それにしても一般的に考えればやはり年代がかかり過ぎると思う。

それよりも、竹内家系図の通り二神二代説のほうが自然であるし無理がない。さらにここで、貴重な資料を入手した。それは、二神氏を調べている二神重則氏から頂いた二神家系図の一部である。これをわかりやすく記述してみると次のようになる。

種尉			
種馬			
種春	種皮	時成 永禄十一年生 吉兵衛 七太夫 肥前於有馬討死 寛永十五年 筑前福岡香 正寺二塔有	嘉林 九郎右衛門 七太夫 法名 梅翁虚白 於肥前有馬口疵 元禄六癸酉正月五日卒 竹 田門福寺葬
種家			

注目すべきところは、この時成とその子嘉林である。二人とも七太夫とも名乗っている。そして、父七太夫は寛永十五年肥前の有馬で戦死（島原の乱）している。七十歳だった。また、子の七太夫も父と一緒に参戦やはり負傷したようだ。ここで、時成と嘉林そして竹内久盛とを照らし合わせてみると、時成は永禄十一年生まれで竹内久盛が竹内流を興し活躍していた晩年を天正の後半から文禄とするとその時期に時成は十八歳から二十八歳ぐらいになる。もし、時成が久盛の弟子だとした場合時代的にはびたりと合っている。

しかし、嘉林はそこそこ生まれていたかいけないぐらいなので久盛に竹内流を習うことは当然無理な話である。この二人のつながりは竹内流系図と符合している。ただしこれだけでこの二人が双永執流の二神だと断定するわけにはいかない。ましてや、嘉林が二神半之助であるという確証は全くない。もっと多くの資料と論証を見つけださなければならない。さらに、もう一つ大事な資料がここにある。「黒田三藩分限帳」（福岡地方丈談話会）と言う本である。この本の中で福岡藩の寛文官録の中に「貳百石 二神丸太夫」の記載を見つけた。さらに、二神以外にも多くの双水熱流の門弟の名前が記載されていることからこの「二神丸太夫」はほぼ間違いなく二神半之助と思われる。

しかし、ここには七太夫と言う名前はない。そこで、先の二神家系図をよく見ると喜林は九郎左衛門とも名乗っているのに気が付く。そこで、ここからの話はまったくの仮説だが、父二神時成七太

夫が戦死した後、子の二神嘉林七太夫が「半之助九太夫」に改名したのではないだろうか。そうすればつじつまが合う。

以上いくつかの資料を総合的に検証してみたが、現時点で時成が竹内久盛の弟子でよの子嘉林が半之助であると断定することはもちろんできない。しかし、これらの共通性は今後二神半之助を研究するうえで大事なキーポイントになることは間違いない。また嘉林の葬られている寺が大分県竹田市にある円福寺ということもわかったので早急にこれも調べてみる必要がある。

つづく

平成十二年十月十五日

二神正聴傳法之正流

此处では、二神半之助から代々約三百五十年続いている双水執流宗家の歴史を紹介します。

双水執流組討腰之廻 略史

流祖 二神半之助正聴 承応（黒田藩 小林四郎左衛門組御馬廻
貳百石 二神九太夫 寛文年間）

豊後竹田の藩士にして竹内流小具足腰之廻を学び後一流を興し二神流と称せり、然るに正聴必勝の術全からざるを憂い普く諸国を巡りて修行し、更に大和国吉野山の深谷に三十七日間立て籠もり諸流の奥中より善悪を取捨し、終に必勝の利を究めしが吉野川の清き流れを見て其の行水の滞らず速なるに心を止め益々己の心胆を錬磨すると共に大いに刻苦工夫し事理無礙のなる事を大悟し二神流を改め双水執流組討腰之廻と称せり。

承応の頃舌間又七の幹旋により筑前直方に来り永らく此处に滞在せり。舌間又七も元豊後竹田の者にして正聴とは謂有る間柄なり、舌間家は大職冠藤原鎌足の後裔元宇都宮氏にして豊後の国主大友の家臣となり弁舌を以て名ありしにより大友侯より宇都宮を改め舌間の姓を賜うと、初代を舌間河内守宗善と云う。

文 禄 の 役

－片山二神文書と愛媛県北条市に残る高麗墓の言い伝え－
常任理事 二神重則

昨年、系譜研究会では愛媛県歴史文化博物館の土居様から紹介があった、松山大学の西園寺源透文庫の中の「片山二神文書」の写しを入手しました、今回は、その中に大変興味ある内容が記載されておりましたのでご紹介します。なお、片山二神文書については、2001年の3月18日(日)に松山市道後子規記念博物館にて愛媛大学の田村教授に講演をお願いしています。(この講演会の件につきましては後日に、系譜研究会の方でご連絡と出席の確認をします。)

二神氏の中で皆様ご存じ戦国末期の二神通範が居ます、その子通種と種範の部分には、このような記述があります。
(下部は口語化したものです。)

通種 孫太夫 右通種ハ稲葉右京之亮殿属

羽柴太閤秀吉公、朝鮮国御征伐之時属福嶋正則、来嶋越後守通総手則朝鮮於潤山国王李昭壤城^ト時、兄弟一番魁入、昭王帷金案上薰醇一陶貝也。則藏抗而陶子猷先鋒正則貝器自金甲之内之携来為家宝、其刻官人ト覚エテ稚女ヲ抱キ逃走スルヲ追掛奪取彼ヲ、対来嶋手ニヲクリ、感賞ニ預リケル。其後稚女ハ兄弟ニ給リ召連レ帰朝之後種範家ニ在テ慶安三年六月相果(諸家ニハ不知、於当家珍事トシテ記之者也)

(附箋)「文禄年中太閤秀吉公朝鮮征伐之刻、兄弟属福嶋正則来嶋越州之手向朝鮮ニ時、明朝之万曆二十年五月廿八日攻国王李昭之壤城、兄弟先登乱入城中、玉帷金葉上得陶器 者与先鋒福嶋氏貝器者携来テ為珍器、又昭王城中官人、携一幼女子走、種範頻進奪之殺官人、則女子貝還家称高麗婆者慶安三年六月死ト云」

通種 孫太夫 右の通種は稲葉右京之亮殿に所属

羽柴太閤秀吉公が、朝鮮国に征伐に行った時、通種は福嶋(島)正則に属していた。来嶋越後守通総の手勢が朝鮮の潤山において国王の李昭壤の城を攻める時、通種兄弟が真っ先に駆け入った。昭王帷金案上薰醇一陶貝也。(不明)則藏抗而陶子猷先鋒正則貝器自金甲之内

之携来為家宝、其刻官人ト覺エテ稚女ヲ抱キ逃走スルヲ追掛奪取彼ヲ、対来寫手ニヲクリ、感賞ニ預リケル。其後稚女ハ兄弟ニ給リ召連レ帰朝之後種範家ニ在テ慶安三年六月相果（諸家ニハ不知、於当家珍事トシテ記之者也）

（附箋） 「文禄年中の時、太閤秀吉が公朝鮮征伐を行ったおり、来島の兄弟が福島正則来嶋越後の守の軍に属して朝鮮に向かったとき、明朝の万暦二十年五月廿八日に国王李昭の城を攻めた。兄弟は、真っ先に城に駆けのぼり乱入した。王座には金でできた葉の上に陶器があった。先鋒をつとめた福島氏は貝器を与えられて、珍器とした。又昭王の城の中の官人が。一人の幼い女子を抱えて走った。種範は、追いかけて、この女子を奪い取りその官人を殺した。その女子を家に連れて帰った。その女子は高麗婆と呼ばれ、慶安三年六月になくなった。

朝鮮の役（文禄・慶長の役）

概略を歴史辞典からみてみます。文禄元年(1592)から慶長三年(1598)にかけ、豊臣秀吉が明征服をめざして朝鮮に侵略した戦争。この戦争の呼称について、朝鮮では「壬辰・丁酉の倭乱」、明では「万暦朝鮮の役」と呼び。日本では当初「唐入り」「高麗陣」江戸時代は「征韓」「朝鮮征伐」、近代は「朝鮮征伐」「文禄・慶長の役」とも呼ばれるようになった。今日では「文禄・慶長の役」「朝鮮出兵」「朝鮮侵略」と呼ぶのが一般的である。

〔文禄の役〕

1592年4月12日、秀吉は16万の日本軍を朝鮮に渡航させた。日本軍は約半月の間に慶尚道と忠清道の主要都市を、5月初めには漢城(朝鮮の首都、現在のソウル)を、6月には平壤や咸鏡道を占領した。

京畿旗道に宇喜多秀家、忠清道に福島正則、全羅道に小早川隆景、慶尚道に毛利輝元、黄海道に黒田長政、平安道に小西行長、江原道に森吉成、咸鏡道に加藤清正に派遣。朝鮮国王の宣祖は漢城を放棄して北方へ逃避し、5月初め明に救援を要請した。

朝鮮に侵入した各大名は、住民を農耕につかせ、兵糧米をとり、反抗するものを処罰する占領政策を施行した。この行為に対し朝鮮農民は義兵を組織し決起した。戦線が広がるにつれ、義兵は朝鮮全域に広ろまった。

また5月から李舜臣の率いる朝鮮水軍は日本水軍を破って日本の補給路を止め、明からも救援軍が朝鮮に入った。明軍は6月に朝鮮に到着、7月の平壤戦で敗れると、日本軍と休戦協定を結び中国へ引きあげた。



1593年1月、李如松を提督とする明軍主力(4万3千人)は平壤に陣する小西行長・宗義智の日本軍を破って、漢城に向けて南下。これに対し日本軍は漢城の北方にある碧蹄館で明軍を破り李如松は撤退した。

93年2月日本軍が漢城に結集するのを見、全羅道巡察使権懷の率いる朝鮮軍は漢城の西、幸山城に陣を構えた。日本軍はこれを攻めたが反撃を受けた。そのため小西行長は明軍との日明間の講和を結ぶ、93年8～10月、日本軍は朝鮮南部に約4万人を残して撤兵した。

【慶長の役】 1597年1月、日本軍は朝鮮南部4道の領有をめざして慶尚道から全羅道、忠清道に侵入したが、朝鮮軍と明軍の反撃を受け、9月からは守戦に立った。98年3月以降は日本軍の守城(倭城)が次々と撃破され、敗北は決定的となった。そして秀吉の死を契機に10月、朝鮮から撤兵を開始したが、日本軍は李舜臣ら朝鮮海軍の追撃を受け、11月、ようやく撤退を完了した。

~~~~~

では、系図に書かれている事柄を見てゆくことにします。

文禄元年(1592)4月13日、1番隊小西行永・宗義智ら1万8700人が釜山に上陸した。系図にある福島正則・来通通総は四国5番隊で、福島正則(伊予国府)、戸田勝隆(大洲)、長宗我部元親(土佐)、蜂須賀家政(阿波)、生駒親正(讃岐)、来島通之・通総は4月17日頃に釜山に上陸忠清道に向けて北上した。

水軍組織としては九鬼、藤堂、脇坂、加藤、来島らの総勢わずか9千200名で、海戦の経験は九鬼と来島しかなく、秀吉は人馬や兵糧米の輸送程

度にしか水軍の必要性を見ていなかったのでは無かろうか。その事はその後の海の戦いにおいて秀吉の軍が、李舜臣の率いる朝鮮水軍に苦戦することによって証明される。

来島通之・通総兄弟は船手衆として活動をしていた、二神通種・種範兄弟も行動を共にしたと思われるが、壤の城と言う城攻めをしている。その事は、壤の城は内陸の可能性は薄く海岸に近い場所が予想される。

以下の文章「来島越後守通総の手勢が朝鮮の潤山において国王の李昭壤の城を攻める時、通種兄弟が真っ先に駆け入った。」では、二神通種・種範兄弟の活躍が記載されているが、文中の潤山はどこにあるのか、李昭とは誰か、壤の城とはどのような城か何処にあるのかが分かりません、詳しい情報が知りたいと思いました。

松山市道後温泉の近くに、中世城跡で伊予の守護であった河野氏の館があったとされる「道後湯築城」跡があります。これの史跡保存の運動をされている土居さんに相談しましたところ、パソコン通信・インターネットで有名な、ニフティーサーブの城のグループへ相談したらと紹介いただきました。(城のグループとは昨年来島・能島の現地でご一緒しました。)早速、質問をしましたところ倭城に詳しい(ハンドルネーム撰津守)黒田さんより、丁寧なご返事を頂きましたので紹介します。

注)倭城 わじょう 日本軍が朝鮮南部に築いた城。

Q. 明朝万暦20年5月28日頃の様子

万暦20年は文禄元年(天正20年)です。その頃には日本軍は、漢城(ソウル)を陥し(5月3日)、有頂天になった秀吉が天竺までも攻め上るという25ヶ条の覚書を出しました(5月18日)が、一方朝鮮半島南海岸では李舜臣の水軍におびたらしい船が撃沈されはじめました。

Q. 潤山の壤之城とはどこか? 潤山は蔚山のことでないか?

壤之城は単に邑城を指すと思われますが、潤山がわかりません。忠清道で山がつく大きな町は、瑞山・稷山・礼山・定山・連山などがありますが、はっきりしません。柳成龍の『懲ヒ録』に、慶州邑城を占拠した日本軍に震天雷を撃ちかけたところ、震天雷の何たるかを知らない日本兵がワヤワヤ集まって来て、時をおかずに爆発したため、恐れをなして慶州邑城からも退却したという記事が、福島隊のこととして『逸史』にも載っているようですから(『福島正則』中公新書68p)、上陸当初慶州方面に向かったかもしれません。とすると東海岸の蔚山とはあながち無関係とはいえないかもしれませんね。

注) 邑城(ゆうじょう)

それぞれの村や街にある城で、街全体を城壁で囲った城、

Q. 国王李昭とは誰？

李昭は国王の宣祖の名である李エン(日編に沿の右側のツクリ。または昡、)の謬りと思われます。

種範が奪い連れ帰った女性は慶安3年(1651)に亡くなった。

愛媛県北条市では、その女性の墓と思われる高麗墓の言い伝えが残っています。JR柳原駅の西側に、二神城と呼ばれ大きな堀に囲まれた片山二神氏の屋敷跡があった。片山二神氏の子孫である二神舜子さんは、その高麗墓の場所は、屋敷内に有ったと言われていますが確認できていません。また、秀吉が長生きのために望んだとされた、朝鮮虎の頭骨を伝えている二神家もあります。



現在の柳原  
二神屋敷跡付近

福島・戸田・黒田・毛利各関西の大名の中にも、船手として二神氏が参加していた可能性は高いが記録が見つかりません。

〆 〆

福島正則は朝鮮の役の後、秀吉より伊予11万石から清洲24万石の大名となった。1600年の関ヶ原の後に安芸・備後49万8千石の大大名となり広島に城をもった。1619年に広島城修築による改易で津軽4万5千石に移され、1624年死亡64才。

来島兄弟 来島道康の長子として生まれた通之は得居家を継ぎ得居通之(幸)となった。通之が文禄の役で戦死したことにより、嫡子が無い得居の家は絶えた。通総もこの朝鮮の役で戦死し、墓は北条市の北、恵良山の麓の大通寺にあります。跡目は通総の子康親が継ぎ、康親は1600年の関ヶ原の戦いの翌年、豊後森(大分県玖珠郡玖珠町森)に移された。(系譜研究会では、豊後移封400年を記念して、来年大分県玖珠郡森で研究交流会を開催します。)

二神通種の子孫は二神島や中島町吉木、松山市西部余戸の二神氏となりました、種範の子等は北条市のそれぞれの二神氏の祖となりました。

文禄の役での兵の損耗率は40%前後と記録されています、福島正則の第5軍の文禄元年(1592)の渡海時が2万5千人強で、翌年5月の兵力は1万5千人弱で損耗率はなんと41%に上っている。二神の兵達も半分は帰っていない事が予想されますが記録がありません。

種範が連れ帰った女の子は名前も父母の事も分かりません、その後の59年間をきっと北条の地で過ごしたのだと思います。ひょっとして朝鮮に史料があるかもしれません。あの戦いで多くの朝鮮の人々が陶工として、他の生産技術者として、そして儒者として日本に連れてこられました。

今回この文を書くにあたりまして、県歴史文化博物館の土居さん・愛媛大学の田村教授、湯築城を守る会の土居さん、ニフティの黒田さんに大変お世話になりました。

|      |                |              |
|------|----------------|--------------|
| 参考資料 | 朝鮮の役           | 徳間文庫         |
|      | 秀吉の野望と誤算       | 文禄慶長の役と関ヶ原合戦 |
|      |                | 文英堂          |
|      | 福島正則           | 中公新書         |
|      | 片山二神文書         |              |
|      | 豊臣時代の伊予領主の史料研究 | 須田武男著        |
|      | 愛媛県史           | 伊予8藩の成立      |
| 他    |                |              |



## 役員のつぶやき ☆ ☆ ☆

### 先祖の島を訪ねる旅

京都市 二神<sup>しげゆき</sup>成幸

2000年9月9日午後、時雨のけむる中、高浜からの高速艇は、次第に島影に近付いた。それが徐々に大きくなるにつれ、私は形容し難い感動に襲われた。

二神島だ!!

先祖の島だ。

想像していたより大きい!



生きてる間に一度は二神島へ行ってみたい。と思うようになったのは、いつごろからだったか。それが、今日達成された。64才の今日実現した。

上陸してからの私は、もう何も見えなかった。何も聞こえなかった。会長や他の人達には悪かったが、「館の椿」も、お寺の何かも一切関係なかった。

すぐさまカメラ片手に島の人々と接触した。

港の片隅で泳いでいるボラを見て、「ここら辺でハマチの養殖は出来ないだろうか」とか「児童達の教育はどうなっているのか」等々…島のオバサン達を相手にもう夢中になってしまった。

驚いたことに、島には分校でなく、「小学校が有る」と聞いてすぐに学校まで行ってみる事にした。

立派な学校が有った?! 児童数三人の立派な小学校が海岸沿いにその偉容を見せた時、私はまぎれもなく夢の中にいる自分を発見したといえる。どう考えても現実の事とは考えにくかった。でもこれは事実なのだ。

島を半周して帰りながら、島の全てに酔っていた。

これが先祖の島なのだ!!!!

大げさに言えば DNA が私を呼んでいた。

## 人生三度目の転機

過去の私は、二度の大きな転機を経てきた。

一は 20 代前半、国木田独歩の言葉に出会った時。

二は 30 代後半、山崎朋子と古田武彦の著作を読んだ時。

それらは、いずれも、私の反骨精神を養い、常に自分を常民的立場に置く基盤となってきた。

では今回の転機は何だろう？

まぎれもなく、DNA が私を呼んでいる。この DNA をどのように子供に伝え、発展させていくか！という事だ！



二 神 島

## 役員のつぶやき ☆ ☆ ☆

---

### 「ふるさと河の内」

東京都 二神<sup>まさき</sup>昌生



山奥へ逃げ込んだ侍たちは、  
なおも奥へ奥へと山奥深く逃  
げ込んでいく。何故？・・・侍  
ならば一時休息をとったとし  
ても、再び戦いを挑むだろ  
うに。

しかし彼らはなおも山深く、  
山から山へ逃げのびる・・・。

そうです、彼らの中には、女  
性加わっていたからではな  
いでしょうか。もしかしたら、  
子供も含まれていたのかも？

いったい何日歩き続けたの  
でしょう。やがて山道は下りに

さしかかります・・・と左手に小川が流れているではないか。命の  
水だ！お腹いっぱい水を飲んだ彼らは考えます。追っ手は、ここ  
までは来ないだろう。この先は下り道、山を下れば民家に出る。民  
家に紛れ込んで農民に化けるよりも、此処には豊富な水がある。

「菊間河の内」は、このような過程でできた村なのだろうか？

人目につかない所に小さな墓石がある。

その横に小さな五輪塔。法政大学の福川先生、北条市ふるさと館竹  
田館長のご両名を墓石にご案内したところ、江戸時代初期の「一石  
五輪塔」との鑑定でした。

戦国時代の末期頃から、この地に居着いたと思われる二神家ご先祖の墓石です。その一段上にも幾つかの墓石が並んでいて、そこにも五輪塔がありました。またその上にもお墓がならび、上に上るほど数が増えています（全部で三段）。叔父の話では、河の内の最盛期の頃でも四十世帯くらいはあったようです。その中で二神家は我が家を含めて三世帯。現在では、全部で四世帯しか住んでいないそうです。

我が家（父の生家）の裏には竹藪があり、その上に神社があります。今も神社には神輿が天井に収納されています。奉納者の名前も欄間には絵も張りつけてあります。しかし何故か、この河の内にはお寺がありません。昔はあったのかも？火事で焼けたのかも？しかし、その形跡もありません。

私の父は十八才の時、単身東京へ出てきたそうです。仕事のない河の内、父親（私の祖父）のいない次男坊、九人兄弟を母親（私の祖母）が一人で苦勞をしながら育ててくれたので、口減らしの意味でもふるさとを出たのではと思います。

河の内の歴史は300年以上になると思いますが、大変な苦勞の連続だったと思われます。

いずれ、消滅してしまうのではと危惧しています。

## 役員のつぶやき ☆ ☆ ☆

### 「知られていない高知県（小才角）二神」

理事 二神 栄三



小才角二神が、高知県に根を下ろした確かな年月は分かっていませんが、およそ400年前と考えられます。初代は霧の中ですが、その影に少し触れてみます。

今年、4、5月ころ、近畿の二神氏の方々に研究会の連絡をしているうち、私の出身を聞かれることも多く高知県と答えておりました。そのうち「エッ、高知県にも二神さんが、いたのですか」とびっくりされたり、また、「昔から居たのですか」と聞かれる方もあ

って、「高知県の西、足摺岬のそのまた西で・・・」と答えているうち、笑いが込み上げて、思わず「ニヤリ」としました。

笑いを誘われたのは、その「問い」が先祖の8代礼蔵（1830～1845）の昔話そのままだったからです。その「昔話」とは、城辺二神氏は旧家と聞いていた前記礼蔵は、初代九郎衛門の手がかりはないものかと、同家に連絡をとり、日時を定めて尋ねて行きました。その折、城辺二神氏が言われるには「土佐に、こんなに古くから二神氏がいたとは、全く知りませんでした。云々」。

城辺ではすでにいろいろな古文書を調べてくださっており、また見せていただいたのですが、小才角初代ころのものは、見当たらなかった由です。帰宅後、礼蔵は「先祖は伊予からの落人と聞かされて育ったが、手がかりがつかめない。庭に落ちた栗の一粒を探すよりも難しい」と家人に話したと言うことです。

小才角は、宝永4年（1707）の「大地震、大津波」で全滅状態となり、二神は先祖書を流失してしまいました。そのため、初代九郎衛門

の出身がわからなくなっており、それを求めている8代礼蔵行脚の「1コマ」でした。

では、「いつごろ小才角に移ったか」を考えてみました。寛永8年に、2代八左衛門の名があることから、それによって九郎衛門の年齢を推量したうえでのものです。

大小多くの戦が伊予でありました。天正13年（1585）の秀吉の四国攻め。この後、河野通直は身柄を竹原に移されましたが、二神本家の通範は風早の地で、天寿を全うされています。推量した年齢からすれば、九郎衛門は戦に出たか、出ないかの年齢になります。慶長5年（1600）関が原の戦いに絞ってみます。平岡善兵衛が河野家の再興をはかって挙兵しましたが、敗れています。九郎衛門は、これに加わったため、追及厳しく土佐に落ち延びていったと考えられます。

【この戦いでの落人については、史料のないままに前述の通り九郎衛門の年齢を仮定した上での、私の推量であることを書き添えておきます。】

関が原の戦い当時の「小才角」の様子は10年前の天正18年（1590）の「長宗我部地検帳」で、伺い知ることができます。同帳に「才角の枝郷 小才角」とあり、屋敷数5（50ではなく一桁の5）また、その記述の中に「荒」「年々荒」の文字が目立ち、近辺の村々にも同じような記載があります。長宗我部元親の「一領具足」制度による人手不足からきた「郷村荒廢」の現れでしょうか。宿毛から8里（近年の道路改修、拡張以前の里程）山また山で平地に乏しく、当時は椎、檜、樟といった照葉樹の原生林が人里近くまで生い茂っていたと、かんがえられます。

芦をそよがす風の音にも肝を冷やす敗残の身が、どのような「つて」があって、この地まで落ち延びてきたのか、子孫の一人である私は、考えるたびに首をかしげてきました。

二代以降の一部を記します。

「土族年譜」に「老（年寄）」として寛永年間に、二神八左衛門、三、四、五代と続き、六代目金助のとき、頭集、銚土、平山庄屋となっております。（以下略）宝永の大地震（亥の大変）以後の先祖は、初代に対してそれぞれ思いをめぐらしたと思いますが、今なお枝分かれした「元の木」が分からないままで、現在、十三代二神至にいたっております。

## 役員のつぶやき ☆ ☆ ☆

### 思いを繋ごう

常任理事 豊田 渉



私が「島」にこだわりはじめたのは、中島町役場に勤めだした昭和47年からになるでしょうか。3年間の高校生活を終えて、二神島へUターンをしたのです。島での生活は、役場勤務の傍ら青年団活動をはじめ、離島青年の活動などの忙しい日々でありました。「島を知るためには、よその地域を見ることではないか。そのことで、改めて自分の住んでいる地域のことがわかるのではないか」ということで、いろんなところを見せてもらいました。

そんな中で、自分の生まれ育ったところのことを案外と知らずに過ごしていた自分に気付きました。少しずつでも、自分のふるさとのことを調べてみようということで、二神司朗先生を顧問、中田和邦さんを代表にした「二神島文化グループ」なるものを発足しました。それ以外のメンバーは高校生。それも彼らのほとんどが松山市内にいました。二神島の中をあちこちと調べて回ったり、松山での会合なども行っていました。

私が小学生の頃、司朗先生は島の中でよく絵を描いていました。松山市立三津浜中学校を最後に教職を離れて、ふるさと二神島に帰ってきていたのです。お家にもよくお邪魔し、お菓子をいただいたり、8ミリフィルムを見せていただいたりしました。絵を習っている同級生等もいました。なぜか私は、絵筆を持った記憶はありません。

役場の行き帰りに、島内や船などでもよくお目にかかるたび「豊田君ところは、ずっと昔に、うちの家から分かれたのですよ。二神の姓を名乗っていたんです。ですが、二神姓もその前は豊田姓で、山口のほうか



ら来たんですよ」とおっしゃったことがありました。そういえば、祖父からもそういった意味あいのことをよく聞かされていました。しかし、その頃はそれ以上の調査をすることなく、時は流れていき、二神系譜研究会が発足するまで、私自身の動きは資料集め以外にはなかったということになります。

昭和49年の春でしたか、司朗先生と中田和邦さんとで長崎市にある歴史文化博物館に「瀬戸内海図屏風」があるというので出かけました。常設はしていなかったのですが、愛媛県から来たことを告げ、快く見せていただいたことを思い出します。その中に、「二上（二神）」「ゆり」の文字を見付けたとき、なぜか深い感動がありました。長崎市内では眼鏡橋を渡り、かの坂本竜馬の刀傷が柱にあるという旅館に宿泊しました。司朗先生はコーヒーが好きでしたから、旅行の途中にはよく飲みました。長崎では「銀嶺」という店に入ったのを覚えています。帰りがけには平戸市や唐津市を回りました。平戸島にはまだ橋が架かっておらず、フェリーで渡りました。司朗先生は時間の合間をぬってスケッチをしていました。ほんの数日間の旅でしたが、当時のことが鮮明に浮かび上がってきます。私はすっかり忘れていたのに、後日拝見したスケッチ帳の中で、柳井港から長崎市へ向かう列車の中で読書をしている私を見付けました。その時に読んでいた本は、小豆島を舞台にした「二十四の瞳」でした。

こうして書き連ねていると、いろんなことが思い浮かんできますし、司朗先生には何かにつけてお世話になっていたんだなと改めて感じているところです。忘れてならないのは、昭和58年に二神島の「民宿西野」へ網野善彦氏が来島された時、司朗先生を通じてご紹介していただいたこと。こうしてみると、人と人との繋がりは不思議であり、そういうふうに組まれているようにも思われます。

まさに時は二十一世紀に突入し、新たなステージの幕が上がろうとしています。今に生きる私達は、過去の歴史に学び、将来へと伝えていく責務があるはずです。そして、やらなければならないことはたくさんあります。系譜研究は地道なものですが、先人の思いを繋げる礎とするために、二神島に「二神記念館（仮称）」をと願うのは、私1人だけではないように思うのですが・・・。

## 「南宇和の歴史と御莊二神氏」

南宇和民俗歴史文庫主宰 藤田儲三氏

1999年9月12日

愛媛県南宇和郡城辺町出憩いの里温泉  
「学習交流会」での講演内容。



藤田でございます。私は、歴史は好きですけども「二神家」について調べたことは正直いって、一回もないんです。ただ、二神家との関係と言いますと、御莊和口の中尾家、それから南郡（※南宇和郡）にたくさんあります岡原家が、私の母方の縁者です。両方とも庄屋さんです。きょうの資料の系図などを見ていただきますと、よく二神家から岡原家、中尾家へ行っています。その逆もあります。私の血の中にも小指の先くらいは、二神家の血が混じっているのではないかと思います。

現在の堀舎（ほりや）さんのお家の二神吾郎さんのお嫁さんは中岡家なんです。これも中尾家と岡原家と両方の家の間の縁者なので、新しく中岡という姓を作った家なんです。中岡家も二神家の血が繋がっているということが言えます。

### ●歴史の嘘と本当

歴史とはいろいろ言いますが、我々の歩んできた道、その記録でありまして、国の歴史は国史（今は日本史と言います。）、世界の歴史は世界史。家の歴史は、二神家でしたら二神家の歴史があるわけです。

「歴史をなぜ学ぶか」、一般的には過去の歴史を学び同じ過ちを繰り返さないと言いますが、これは建前です。歴史というものは、ほとんどわかっていません。わかっております事実をつなぎあわせて一つの歴史にするので、ちょうど推理小説のような面白みがあるので、それを読むような気持ちで学ぶのやないかと思います。

私はいろいろなところでお話をさせていただきますが、ほとんどが「歴史の嘘と本当」について、例えば城辺の歴史、南宇和の歴史、南予の歴史ということでお話しをするんです。歴史については、今までこれが正しいと思われることが案外本当でないことのほうが多いんです。きょうも後のほうでいろんな系図がでますので、これについても大変失礼なことを申し上げるかも知れませんが、「歴史というのはまあ本当じゃないことのほうが多い」という考えでお許し願いたいと思います。

### ●観自在寺御荘は青蓮院門跡領一番荘園



この南郡全体を「御荘」と言います。古い文書によりますと「御荘」といいますのは昔、南郡は観自在寺が開発しまして、税金のがれのために比叡山の下寺十楽院に寄進をしたため荘園になりました。それで「観自在寺御荘」というようになりました。それで、お寺の名前が落ちてまして御荘という地名になったんです。荘園というのは全部「御荘」というんです。お隣の幡多郡は幡多御荘、瀬戸内海の弓削島は弓削御荘というておりました。「御荘」として本来の名前が落ちて御荘だけになったのは、現在はここ南宇和郡の御荘だけです。今日申し上げます御荘というのは、南宇和郡全体のことだと思っていただきたいと思います。

ここは十楽院は合併いたしまして、青蓮院の荘園になるんですが、

そこの荘園の一番大きい荘園なんです。そして税金（と言いますか、小作料と言いますか）、お金も持っていきます。あまかづらや白皮（鹿の皮をなめしたもの）などを京都へ送るんです。それが青蓮院荘園で一番多いので、今の高知県や北宇和郡のほうも入り、現在の南郡よりは大分広がったようです。そうでなければ、たくさんの税金を払えなかったと思います。

●荘園の房官が御荘領主に。南郡の領主は勸修寺？

この御荘に京都（青蓮院）のほうから、税金をとるために坊さん（役人とは違い、代官僧とも房官ともいいます。）が来ます。これが宇多源氏の谷氏です。昔、南郡に来たのは全部「勸修寺（かしゅうじ）」と言われていますが、そうではないんです。

資料の7ページを見てください。この中に、宇多源氏の「谷」家があります。これは本家が来ております。そこに書いてありますように正二位の大納言です。これがずっと続きまして、土佐の一条、九州の大友に攻められまして2年くらい、御荘は大友の占領下にありました。その時に、谷家のほうは京都のほうに追われます。

こんどは一条の家臣（といいましても親類）になる「町」家が来ます。この町家というのが勸修寺から分かれておりますので、よく間違えて勸修寺というんです。勸修寺ということを使っておるのは、三間町の土居清良のことを書きました「清良記」という小説本の中です。軍記物ですから小説であり歴史書じゃないんです。それにあったために、南郡の領主は勸修寺というように言われてます。（ただ、勸修寺の分かれなので使ったかもしれない）

●御荘領主は伊予第一の高位・高官の家柄だった

ここも土佐一条家の諸太夫と言いますから番頭さんみたいなものでしょうか。それでも土佐に下った時でさえ、正三位です。中納言くらいの家柄ですがたいしたものですよ。一条の力で、土佐に下って南郡の領主になるわけです。本家のほうの京一条の関白（今でいう総理大臣）や摂政（天皇の代わりに政治を執る人）をしている家柄の一条家にお嫁さんに行っております。これはたいした家柄で、中世の伊予の領主では一番の高位・高官であったと思います。

●南北朝時代、南予は南朝方ばかりではなかった

南北朝時代の南予は、全部南朝（後醍醐天皇方）方だといわれていますが、そうではないのです。北宇和郡津島町の満願寺の大般若経の後ろに南朝の年号ばかりだから、「やっぱりここは南朝の勢力が強かった」と言われとったんですが、調べてみると北朝もいっぱいあります。

私くらいの歳でしたら南朝のほうが正しいというような考えを持

っていますし、楠正成とか新田義貞が天皇家に忠義を尽くしたと言われていますが、南北朝時代どちらがいいということはないのです。たまたまこれは、明治になりまして貴族院で『南北町正潤論』ということで、どちらが正しいかと論議になった時、明治天皇が「南朝のほうが正しい」との裁断を下したからです。明治天皇は北朝の系統の天皇ですが、南朝のほうが正しいと言ったもので、戦前の教科書も南朝のほうに力を尽くすのが正しいと言われておりました。これも、あとで二神家の系図にそういう考えが反映しているということを言います。

#### ●宇和島の支配下に

江戸時代の南郡は宇和島の支配下になります。伊予は、はじめは小早川隆景、戸田勝隆となります。戸田勝隆は朝鮮侵略に行き戦死しました。戸田勝隆は神社仏閣をたたき壊し、地方の豪族なども殺してしまったなど悪逆な男といわれていますがそうではないのです。そういうことはなくて、この人はクリスチャンであったのでお寺や神社に対してはあまり良いようなことはしていなかったということでしょう。

その次が城作りで有名な藤堂高虎。その次が、富田知信と言われていますが、知信は宇和島を拝領した時は10年も前に死んでおりますので、子の信高が来ています。これも最近まで、あまり言われなかったもので系図には知信というように書かれています。ほとんどの系図というのは明治にできています。昭和ごろのものもありますが、明治より古い系図（系図の形に線を引いて作ったもの）はないと思っています。

そのあと伊達秀宗が慶長19年(1614)に10万石をもらって、元和元年(1615)に入りました。「伊達の長男であるのに宇和島へ来たのは、お妾さんの子であったから」といいますが、そうではありません。ぜいたくに育っていたため、仙台藩60万石は、とてもむつかしいので政宗がこちらへ来させたようです。

この秀宗が入ってきた時に付いてきた家老が山家清兵衛(やんべせいべえ)で、今、和霊神社に祀られております。この方がこの「緑」に来たというんですが、そんなことはありません。あの方が祀られたのは、農民にやさしかったからということですがそんなこともありません。ただ、あの方が死んだことによって崇りと思われるようなことができたので祀られたんです。

神様で祀られている人で、良い人というのはほとんどないですよ。皆な何かに崇るので、崇れないように祀るのが神様ですから。崇るような人はお願いしたらかえって力が強いのでご利益があるというのが神様です。

### ●伊達領下の御荘組。組・村・浦と間のしくみ

御荘などは、伊達領ですね。江戸時代に「藩」は公式にはないんです。明治2年に藩ができて明治4年までしか正式にはないんです。文書で江戸時代に「宇和島藩」と公文書にあったら偽物で、後から作ったものです。南宇和郡は18村。それから4つの浦と2島（沖の島、鵜来島）がありました。

その当時の村の組織といいますと、御荘組（松之庄とも）があり、その下に村があり、海岸部は浦となっております。支配体制としては、代官がおります。そして村役人が庄屋・組頭・横目（これは藩の目付とつながっている）、その下に五人組があつて五人組頭がいます。

百姓のほうは、「本百姓」。（これは、その村の耕地を農家の数で割りまして、平均ほど持っているところ。100町歩で100人でしたら1町歩。それを本百姓と言います。）。本百姓の半分ほどが「半百姓」。その半分が「四半百姓」。全然土地がないのは「水呑」と言います。江戸時代は百姓が大勢おったかという、そうでもないです。

ここの「緑村」でみましても、家数が107戸あります。そのうちで農家は63戸です。あとの40戸ほどは何をしたかという山の仕事とか、村には工業者、商業者は置いてもらえませんがただ農業に必要なものは工業者でも置きます。ですから、樽屋・鍛冶屋などがおりますので6割くらいしか百姓はいないんです。

### ●お庄屋さん

お庄屋さんは、どれくらい土地を持っていたかといいますと、その村の大体1割ぐらいです。緑村でいいますと約5町ぐらいです。これは、ほとんどが二神さんはお庄屋さんですから覚えていただきたいと思います。税金はほとんどが物で、農村はお米、海岸は大豆ですね。雑税では漆とか炭とかいろいろ、海岸の魚のほうは分一銀、宇和島藩のほうは五分一銀で2割です。大変多いようですが、全国平均は20分の1です。ここが5分の1とられたら高いように思いますが、生産量というか漁獲高が莫大な量なんです、ここは。漁獲量は全国平均の20倍ほどあります。税金を払った残りの額でいいましてここはたくさん残っております。ここは豊かだったんです。

庄屋というのは百姓をいじめるかのように小説や映画でなっておりますけど、そうではないんでして、庄屋さんは田んぼもたくさん貰っておりますし、それを百姓に耕させることもできます。お金はある程度貯まるんですが、藩のほうでお祝いがあつた時はその村のほうからお祝いをします。他所のほうで火事があつたとか、何か食料を送らないけん時は、全部お庄屋さんがその村の名前で出しとるんです。

私はいつも言うんですが、「庄屋というのはダムみたいなもの」で、普通はお金も米も貯えておるけれども必要な時は百姓に代わって出しておるんです。無茶苦茶なことをしておったら何百年も続くわけがないんです。やっぱりこういうことも考えておかないかんと思うんです。私はもう20年も前からこんなことを言うとりますけど、最近では、宇和町の歴史博物館の大石慎三郎館長さん等がそのことを言われだしました。そして、江戸時代の生活のことを書いたどの本を見ても、その影響を受けて農民は苦しかったんじゃないということを、最近は書くようになっていきます。ちょっと自慢しときましょう、私は20年も前から言いよったんですから。

#### ●御荘二神氏について

二神氏は南郡に来る前は、長門の国の豊田郡から豊田氏になり、伊予の国の二神島に来て二神氏になり、南郡に入ったのは「緑」だろうと思います。そして城辺のほうへ行き一本松や各地区に行ったと思います。

はじめのほうに藤原隆家という偉い人が出ておりますが、中納言で太宰大貳の孫（「まご」と呼ばずに「そん」）、つまり子孫、これからあとは子孫ですよということです。藤原隆家は、関白道隆の子で有名な一条天皇の中宮の定子（ていし）の弟なんです。定子はよく知られていますのは枕草子の清少納言が仕えた人です。従三位で中納言になっているんですが、この当時、兄さんの女のところに花山法皇と言うのが通ってきておったんです。この輿に弓を引いたりしたので出雲権式守に下げられ、後に権中納言に復しています。

ちょうど叔父さんに、「この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」の句で有名な道長がいまして、兄弟（父道隆と道長）で争いをしますので不遇な目にたびたび遭うんです。道長といいますと一条天皇の奥さんに彰子が中宮に入っております。彰子のところにいたのが、源氏物語の紫式部です。このときにはじめて、一帝二皇后と言いまして1人の天皇に皇后が2人できたんです。二号さんはたくさんあるんですが、正妻が2人といいますのはこの時だけです。

この隆家の子孫が現在の山口県の豊田郡に住み着きまして豊田氏を興したんです。豊田の名前の『輔』が続いておりますが、大領というのは今でいう郡の長官で、国司の下で政治をする人です。そこに混ざっております総領といいますのは、役職とは違いまして、その一族を統括するものです。一族の中で統領（総領）でないのが庶子と言います。庶子というのは明治になって、戸籍法では正妻以外にできた子供のことを言います。

この当時の庶子は、長男・次男ではなく、一族の統領と統領でないのが庶子だったんです。

#### 《緑村系図について》

##### ●緑村の系図にある勸修寺左馬守基俊は創作上の人物

そして種家になりまして、二神姓を作ったというように（系図によっては種家のあるところとないところがあるようですが）なっております。この中の南郡の系図はそうようになっておるようです。それからが問題なんで、ここにさきほど祝辞の中でも言われておりましたが、この種家が勸修寺左馬守基俊の名前になったというようなことを書いております。

けれどもこれはもちろん間違いで、どうも基俊というのは創作上の人物で、はっきりした資料の中には出てないようです。それから後も御莊勸修寺と続いてそれが二神と一緒にになっているように、二神〇〇が勸修寺〇〇というようになっておりますけど、これは全部明らかな間違いです。勸修寺というのと二神氏というのは全然違います。それから後のぶんも、何代何代とありますのも、実際におった人もありますが、これ前後がいろいろ入れ違っておりますので、あまり当てにならない系図です。

##### ●懷良親王は南郡には来ていない

この系図について書いた系譜があります。文章の上のほうに番号を入れています。15行の下に「征西將軍懷良親王ヲ奉シテ九州へ下向ニ從ッテ御莊ノ地ニ来ル」とありますが、懷良親王は南郡には来たことはありません。九州に行き九州で没しました。ずっと時代が違います。

30行くらいのところに、「兵庫頭基明左馬頭基詮権太夫基経」とありますが、南郡のお宮の棟札に出てきますからおったんですけど、もちろん時代は全然違います。

##### ●満濟准后日記

そしてその後に、「永享四年正月二十三日ノ日記記載ノ満濟准后日記（国宝古文書）〈※現在、重要文化財〉ニヨルト伊予国羽和郡内青蓮院門跡領へ御莊者共羽和郡西園寺大内合力云々」とこれが二神家にあるように書かれていますが、これはありません。この書類は「二神新左衛門ガ所持シタ」ように書いてありますが。これは違うので、宇和旧記の中にありますのは、そのようなことを書いてあるのではなく、「南郡にいる勸修寺というのは本当はこの領主ではないような」ということを書いておるので「左馬頭トモ御莊ノ守護トモ極メ難シ、緑村新左衛門ノウチニアル書状ニ見エタリ」。「今度、京都で不慮のことがあったので、下国しておったところ便船がないので、よう



上っていかなんだ」、ということなのでその事情の手紙を出したということを書いておるわけです。おそらくこれは、原文をあたらずにこのようなことを書かれたものだと思います。この時の御荘の左馬頭とか何とかというのは戦国時代です。この「満濟准后日記」は南北朝時代ですので100年以上違うわけです。ずっと昔の文書をここへ持ってくるというのは間違いです。（※永享4年=1432）

●緑弾上は、小説「清良記」の中の人物

そのあと、「戸田勝隆ニ接收サレタ」というようなことがありまして、45行の次に、「勸修寺左馬頭、勸修寺権太夫ガ惨殺サレテ、奥方ガ緑弾上・・・」とありますが、もちろん南郡の領主は斬られたことはありません。秀吉が天下をとりましても、ずっと城に3人は残るんですが、宇和の西園寺（後に殺されますが）、御荘、三間の土居です。3人とも城に置いてもらって、そのあと城から引くので殺されたりしたことはありません。そして、ここにあります緑弾上というのも、小説本の「清良記」の中にしか出ていないので、実際にいたかどうかはわかりません。

この勸修寺の身籠もった奥さんが二神家のほうで助けて、できた子供を二神家の息子にめあわせたというようなことが書いてありますが、どこまでも小説本のことなんです。

●二神新左衛門と山家清兵衛さんは会えない

51行には富田知信、これは先程も言いましたように10年前に死んでおりますので信高なんです。そのあと、「伊達家ノ家老山家清兵衛様ガココへ来テ意ヲ用チ善政ヲ行ワレ二神新左衛門正種宅ヲ訪問サレ・・・」なんとかありますが、これもだいぶん年号が違います。二神新左衛門といいますのは宝暦7年（1757）の人なんです。山家清兵衛は元和6年（1620）ですから、130年間の年号の違いがありますから、二神新左衛門と山家清兵衛さんは会うことはできません。

系図なんかには、100年も200年も前の人が、会うたようなことがあります、その典型的なものです。

●尾崎藤兵衛は懷良親王と一緒に下向できない

そのあとに、「尾崎藤兵衛懷良親王ト共ニ下向ノ武将・・・」とありますが、もちろん懷良親王は南北朝の人ですし、尾崎藤兵衛というのは戦国時代のここの領主の3人の家老にあたります与力衆の1人ですから、これも200年違います。大変失礼ですが、あまりこのような、年譜・家系図というのはあてにならないと言えます。

## 《二神家外記、内記について》

### ●二神家外記、内記

中には明らかな間違いもありますが、これは城辺の二神家に伝わるもので「二神家外記、内記」というものです。これは二神嘉（あやなり、藤種号回天）という人が書いたものを、ほりやさんの二神伝蔵さんが書き写したものです。中には間違いもありますが、「緑」のものよりもずっと間違いが少ないので、これによりまして系図を作ってみました。

これは南郡の二神家系図です。一番はじめには藤原鎌足を書いて、そのあと豊田氏が続きます。途中で知行寺というふうに姓を名乗っているようです。そして、こちらの二神氏は種吉から「種」を通し字にするようになったと言われています。そして、種家藤十郎が二神島へ来まして二神の初代となっています。これは景浦先生（※景浦勉氏）が作られた系図にも、種家が二神の初代と書いておられます。時代というのは元寇の頃、弘安年間（1278～1288）の人ですね。鎌倉幕府でいいますと執権の北条時宗時代です。

### ●家経が御荘の祖では

そのあと、種吉で十郎左衛門そして種直、家直となります。この家直が風早の二神となっておるようです。その弟に2人おりまして、家経が御荘の二神氏の系譜で祖になっております。それからずっと続きまして孝種、（ ）内に孝蔵、孝兵衛と入れておりますが、外史の中をみますと大変孝行な人だったので三郎兵衛という名前であるけれども、人は皆な孝蔵や孝兵衛と呼んだと書いてあります。

それからずっと種が続いております。ただこれは、実在か何かは確かめる方法は古文書なんかありませんで、わかりません。

種基からは資料もあります。2枚目のほうになると思います。種基新蔵というのがあります。その子供の長男のほうは緑のほうにおり、はじめに正種というのは、緑の庄屋でしたが途中で城辺のほうへ行くというようなことを書いてあります。

まあこれは、ほかの庄屋でもそうなんですが、ほかの庄屋へ行くときは必ず弟をやらずに親が隠居して行ったり、兄のほうが行くんです。経験のある者が他所へ行きますから、弟や子供に現在屋は譲るのです。正種が城辺の庄屋ということになっております。ただ、宇和島藩の「記録書抜」で見ますとそうではないので、種基の時にもう城辺の庄屋になっております。この外記・内記に書かれておるのは、ここは間違いです。正種が城辺に行ったのではなく、親の種基のほうで城辺の庄屋になっておりますから違うと思います。

### ●緑の庄屋「河野」

そして、種基の一番下の子供が緑庄屋のほうをとるというようになっております。弟がとるようになっておりますが、本名と通称は種通、清之丞。その子種敏は清之丞というようになっています。見てわかりますように、あまり二神家に「清い」という字を使う人はいないんです。ただ正式の文書で見ますと河野清之丞と河野清之助というのが緑の庄屋になっておるのは間違いないんです。

それで、2つのことが考えられます。こういう庄屋がおったので二神家の系図の中に入れておかんとおかしいというので、二神家のほうで名前だけ入れたということも言えます。もう1つは、実際に二神の姓が河野に変わったのかもしれませんが、どうもそのようなことは少ないようです。

ここに書いてありますように、「大成郡録」といまして宇和島藩の公式の文書でまず間違いはないと思います。それで、城辺の庄屋は新蔵、その次の宝暦7年（1757）、51年くらい後ですが、その時は新左衛門になっております。同じ時期に河野清之丞と河野清之助が出ますから間違いなく藩のほうに届け出して、藩のほうが知っておりますのは河野姓ということが言えると思います。

### ●代官

そしてもう1つ、代官のことです。これは一覧表というのがありますから、私が何らかの文書に出ておりますのを拾ったもので3人くらい落ちておるんですけど、時代的にこうなっておるというのをつなぎあわせました。これで見ますと、二神は3代代官をやっておるといわれております。さきほどの緑の系譜で見ますと3代どころではなくずっとやっておるように書いてありますが、正式文書で見ますと二神新蔵しか出ておりません。その前に、河野清之丞がでております。代官には在郷代官と侍代官がありますが、初めは網代新左衛門といまして御荘と津島と一緒に代官をやつとります。初めのほうは代官いまして宇和島におりまして、地方には下ってこんのですよ。

それから次は、不破武兵衛ですが、これも間違いなしにありました。そして、河野清之丞、二神新蔵も間違いなく出ております。その次は、脇田源四郎が侍代官で来ており、それからはもう明治まで侍代官が続きます。そういうことで、ここはたぶん河野という庄屋や代官がおったので、二神家の系譜の中に書き込んだのではないかと思います。いろいろと清之丞という文書が残っておるはずですから。これは、そのように考えるほうがいいと思います。

そして、種元から真っすぐ下へ行きますと盛種というのがあります。

この盛種も河野清之丞というようなことを書いておるものもありますので、まあどれが正しいのかちょっとわかりません。そして、どのようなところからお嫁さんに来ておるのかというようなこと、養子に行っておるようなこともそこに書き込んでおります。その後がわからないところ、これなんかがたぶん土佐のほうに行ったり各地区に行った二神、南宇和の二神が行ったようなと言われているところではないか思います。

一本松に行った庄屋は、この外記・内記では、河野清之丞の子供になっております正家、種則そして後がわかりませんが、この子孫が広見に行って一本松の二神になったということをこの人は書いております。

明治になった時は、新三郎という人がおるがこの人はこの家で、新三郎は正家という人の位牌を祭っておるというようなことを書いております。

#### ●猿侯の話

そして、猿侯十兵衛というのがありますが、本名盛種で、末女某が猿侯婆。身体が長大、腕力絶倫などと言われとって、結婚相手を選びすぎてとうとう一代嫁さんにいかずにすんだということを書いております。

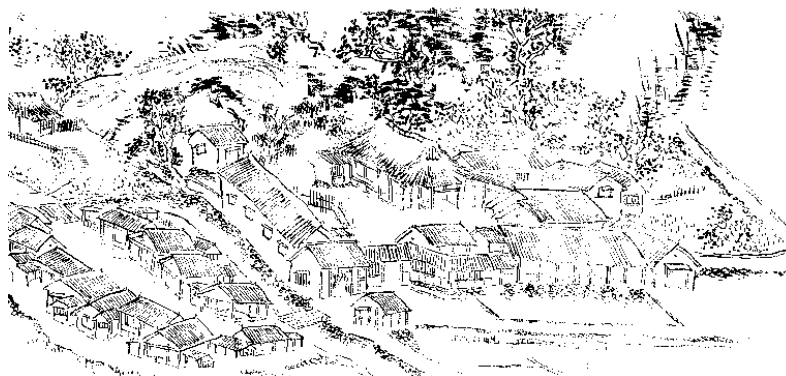
この話は、城辺の二神へ行っての帰りに豊田町の川で子供が2人遊んでおるのを見かけます。「もう夕方じゃから帰らんか」というたら、「おんぶしてくれ」というので、「ああ、これはえんこ（河童）やな」ということに気が付いて、背中あわせに負うて帰った。

家ですぐに湯を沸かさせ、「お湯でゆでる」というたら、「助けてくれ、もういたずらはせん。そのかわり魚を毎日持ってきてやる」というので助けた。それから、魚を持ってきた。魚をかける木のかぎじやったんで、たくさん魚をかけすぎて木の枝が折れたので、鹿の角に代えたらその時から来なくなった。

それで、猿侯（えんこ）は鹿の角が嫌いということになります。私なんかも子供の頃は、川に行くときは必ず、鹿の角で作ったものを腰に着けていきよりました。

そして、伝わっているという「猿侯皿」は城辺町で豊田に移った二神氏の人が持っています。現在は神戸か横浜かへ行かれておるということなんですが、まあ、見た人の話では、「模様が茶色でもみじのようやった」と言われています。日本のものではなく向こう（海外）から入ったものであれば人に見せたら密貿易で叱られるので隠したという人もあります。まあ、どんなものか私は知りません。

●城辺二神・ほりや二神



これは、「二神内記」からのものですが、城辺の二神から分かれまして「ほりやの二神の系図」、それもそこへ資料で付けておりますのでみてください。

ほりやは文学の家柄です。城辺二神の深蔵さんとか内記・外記を書いた藤種さん（嘉・あやなり）。そして、駿吉さんの妹は岩村男爵の息子さんところへ行かれております。

二神新左衛門は紙すきをここらではじめたんです。宇和島の産業のことを書いている本には必ず、二神新左衛門が紙すきを願い出たので許したとあります。宝暦14年（1764）です。

それから、二神深蔵は長州征伐のときに大勢の人を連れていったんで、褒美に郷士（地方におります士分扱いということ。明治になっては認めてくれませんので士族ではありません。平民扱いですが。一代限りで士扱いをしてくれる）に取り立ててもらっています。また、別家のほりやさんの彦一さんと一緒に城辺の蓮浄寺川の川替えをしまして、碑も建っています。それによって城辺の町ができたということです。水害がたびたびおきていけないので、この川を治したということです。その借金に戦後まで困られていたようです。それくらい大きなお金がかかったようです。そして板垣退助らと一緒に国会を早く開けというような自由民権運動をされています。そして、県会へ2期出まして副議長にもなっています。

本家の駿吉さんは衆議院議員に出られたりしています。愛媛県百科事典の中に二神氏は愛媛県に4人しか出ていないんです。東予壬生川の二神喜十さんは学校の校長で、後に牧師さんになられる方です。その方の他の3人は城辺二神の本家と別家ほりやさんの人だけです。

ほりや二神家は文学の家柄で、御莊三歌人の1人二神永世がいます。本居宣長の養子の本居大平の門人録にも名前を連ねています。この家には、本居宣長の書なんかもたくさんあります。種永（彦一）さんは、第1回の県議会に出ていますし、川替えを一緒にやった人です。伝蔵（蘭圃、碧堂）さんも歌人として知られ、長い間町長さんもやられました。

愛媛県で短歌の月刊誌を出したのは、この「草の葉」というのが最初なんです。これは御莊の八幡神社宮司の石野さん、二神さんたちがやられたので、そのあとすぐには月刊誌は出ませんでした。戦争に入りまして途絶えるんですが、短歌の月刊誌はこの南宇和から始まったんです。これから愛媛県のその後活躍する歌人も出ています。これに投稿した同人は全県下におります。四国西南地区の短歌の月刊誌では一番初めということを知っておいてもらったらと思います。

二神三兄弟の一人範蔵は財界で活躍し、山下近海汽船の社長をしています。別家の二神一治は医者で温故堂といいます。緒方洪庵が作った大坂の適塾に入っていました。2、3年前に、この門人帳に名前があるということがわかりました。初代の南宇和郡の医師会長もやられております。

ここにありますが絵図は、二神さんの次の矢野というお庄屋さんの家にあつたものですけど、城辺の庄屋屋敷です。場所は現在の農協のところですよ。二神家はずっと宇和島藩の庄屋なんかでも上席ということを言われておりますが、天保までは正木の蔵岡、僧都の岡原、板尾村（増田）が上で、その次くらいの位置にありました。それが年を経るに従ってだんだん上のほうに上がっていくことがわかると思います。

時間がないので最後のほうはかけ足になり、大変、わかりにくいようなつまらん話をしましたが、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。（了）

御莊二神氏家系図

(二)神家外記・内記」その他により藤田作製、一部省略)

大藏記  
藤原録足……豊田輔平……輔成……二神種家……家直……風速二神  
知行寺  
昌種  
家経……俊種  
十兵衛

久徳孫四郎(吉田守士)  
某女

御莊代官  
種基  
新藏  
種長  
重種  
種綱  
守種……某  
(城辺村司長)  
安之進  
大藏

御莊代官  
正種  
城辺二神  
種行  
柏舎  
新兵衛

西蔵  
道種  
善種  
長女某  
安岡宅右衛門(城辺種源)

正昭(中ノ川村庄屋)  
赤松忠兵衛(下道村庄屋)  
長女某  
二神守種  
次女某  
実藤良藏(内道村庄屋)  
香伯  
某女  
末女某

緑村庄屋の跡を継ぐ

種通  
種敏  
種正  
清之丞  
清之丞  
清助  
?

一本松二神  
正家  
種則  
盛種……精一  
豊田二神  
(豊田の島所神)  
(豊田大藏)

新三郎  
末女某  
(豊田大藏)

注「二神内記」には、緑村庄屋であり御莊組代官であつた河野清之丞の系譜が一部入っているようである。高知県西南部の二神は御莊二神より出ている。

城辺二神家（城辺村庄）

代官  
二神種基  
新左衛門

實藤伊之助（内膳庄）

長女某

兵衛伊右衛門（吉田藩内庄）

次女某

田中喜三治（川之石村庄）

三女某

都築憲行（宮内村庄）

四女某

城辺村庄

守種

安之進

守種

李種

小三郎

番伯

近藤東左衛門（村庄）

女某

宮内村庄

網好

都築憲行（宮内村庄）

長女某

某女（川之石村庄）

網秋

網紀

堀舎二神祖

網方

兄網秋の跡

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作

岩村八作



堀舎二神

網好 ○網紀 網方 宗家城辺二神を繼ぐ

網清 (宮内村  
庄屋敷  
網の跡)

網精 (美濃地方(内津浦庄屋)の子  
奥之丞)  
= 別家新宅二神  
清水善右衛門 (長月村庄屋)  
新 = 峯一郎  
某女 (平城村中馬)  
勝次郎  
某女 (平城村中馬)  
德松  
豊四郎  
清

岡原九右衛門 (信濃村庄屋)

二神貞綱 (別家)

網水 (成瀬・熊一郎・十兵衛)

傳次 (草津)

信敏 (分家)

赤松某 (下湯田)

高

⑤風水・彦一  
千代 (平城村馬十内中女)  
某 (字和馬)  
時  
某 (九瀬村)  
秀  
退古某 (國府)  
治 (大坂通門人惣  
(網州) (松久庄屋之)  
村長)  
来三郎  
キチ (ま久六の玄  
夏南  
⑥伝藏 節藏 (富田竹馬)  
可長  
為 (深田)  
利 (尊進)  
完藏 (目黒松田通)  
範藏 (山下近湯汽船社長)  
雅  
彰次郎  
梯吉 (王國憲 村長)  
妙 (松見町官政署本)  
三 (松見町)  
浩四郎 (南野公早妻)  
不器男 (大倉橋九瀬之)